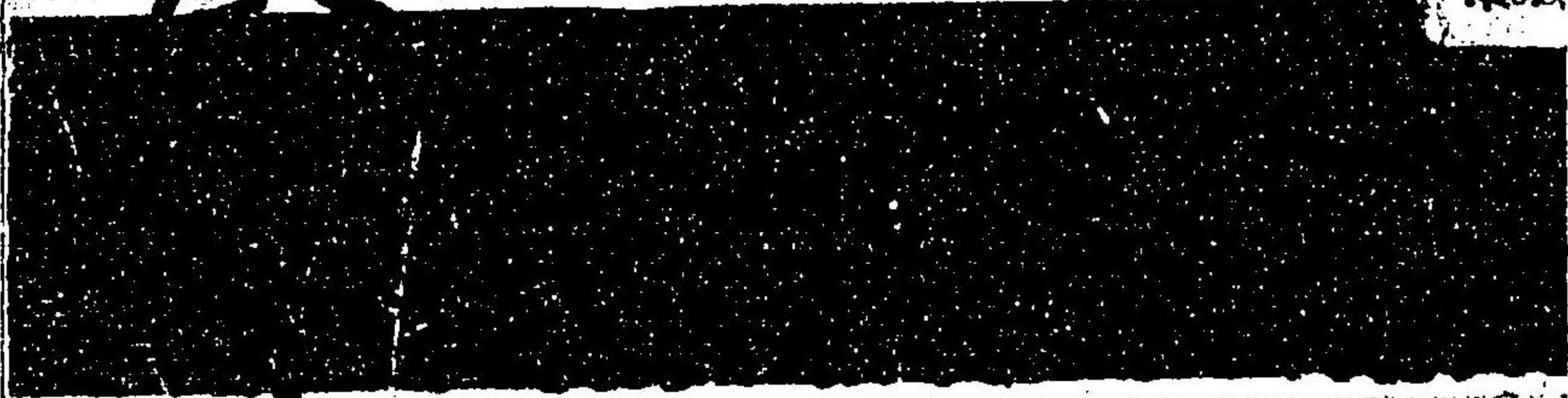


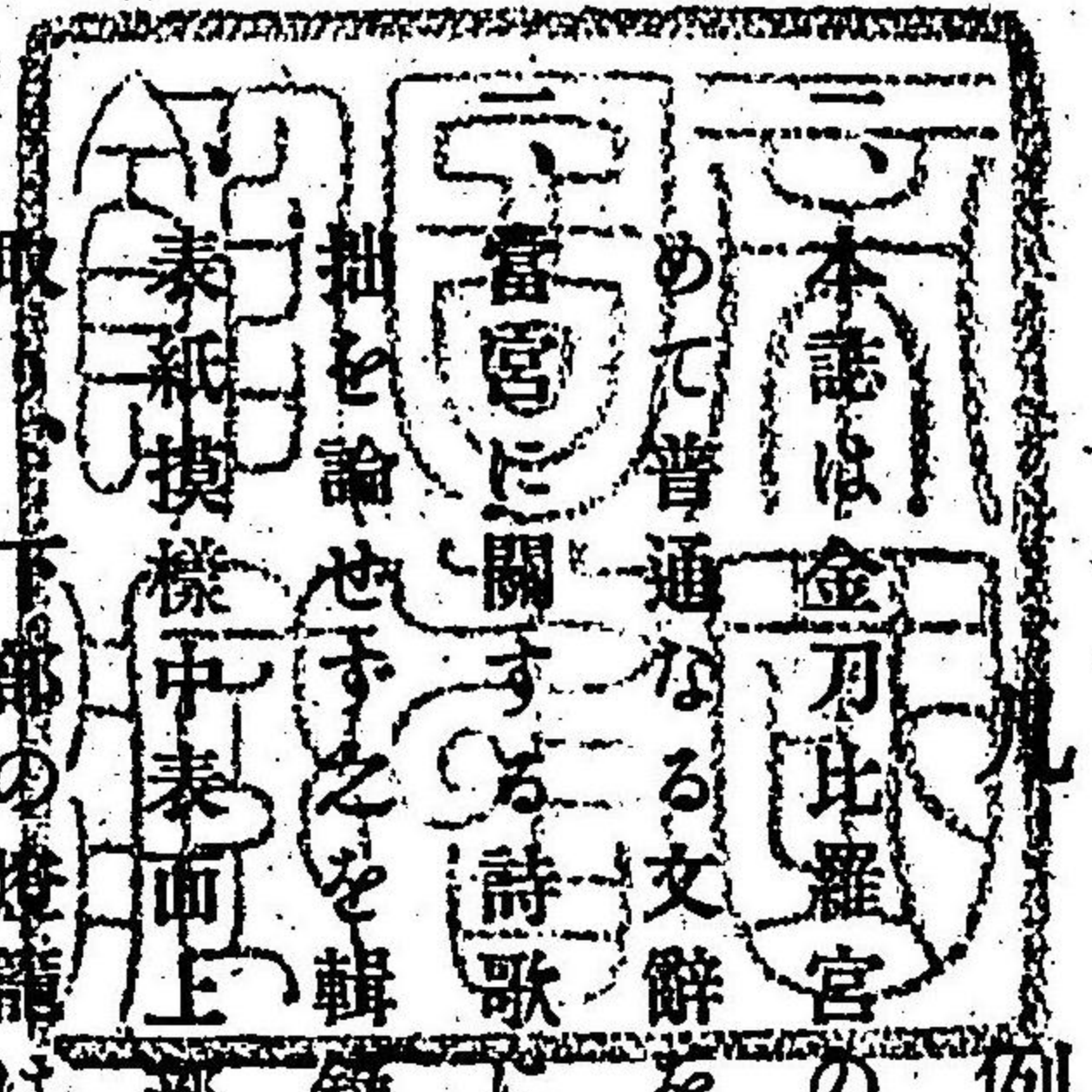
2/2p30



比羅宮記



31
35-2



本誌は金刀比羅宮の参拜者に便せむが爲編輯せるものなれば
めて普通なる文辭を用ゐたり

當宮に關する詩歌にして實況を想見するに足るべきは古今と
拙を論せず之を輯録せり

表紙摸樣中表面上部の横劃は材料を當宮所藏國寶辨財天圖中に
取り、下部の燈籠は世に奈與竹形と稱せらるゝものにして同國

寶奈與竹物語繪卷中に取り、また金刀比羅宮記の四字は宮内省
御歌所参候大口鯛二氏の筆になる

一、寶物に關する凡例は其目錄の始に別記せり

明治四十年三月

編者 識

明治 40 6 3
内交

索引

第一章 總說

本宮概說

本宮沿革

第二章 祭儀

祭典

大祭

櫻花祭紅葉祭

御田植神事

頭人

東遊

神主舞諸司舞

八少女舞

第三章 境內

一一九
一一四
一一三
一一二
一一七
一一五
一一二
一一一

同表上段	四
同富士之間	四
林泉	四
社務所與書院	四
同柳之間	四
同菖蒲之間	四
同春之間	四
同與上段	四
(花之間)	四
(三之間)	四
寶物館及青葉岡	四
寶物館	四
沿	四
構	四
寶	四
青葉岡	五
風	五
光	五
草	四
造	四
物	五

第五章 雜記

樹木	五
設	五
職制	五
境外末社	五
貴紳參拜	五
建物統計	五
水道統計	六
鳥居統計	六
石階敷石玉垣統計	六
立燈籠統計	六
高麗狗統計	六
水槽石碑統計	六
社設電話統計	六
琴平山面積并區分	六

第六章 境外

琴平町
 官衙公署
 琴平公園
 金刀比羅宮神事場(御旅所) (南神苑)
 同宮鞆橋(浮橋)
 同宮高燈籠(北神苑)

八

六五
 六六
 六七
 六七
 六九
 七〇

○寶物目錄

同凡例
 同索引
 同目錄
 同統計 (整理上區分)
 同統計 (品種上區分)

七五
 七七
 七八
 一一
 二一
 二五

○挿圖目錄

一東遊圖 (伊東紅雲畫)
 一大和舞圖 (同人畫)
 一八少女秘曲舞圖 (同人畫)
 一八少女舞圖 (同人畫)
 一琴平山全景
 一櫻馬場圖
 一賢木門圖
 一本宮圖
 一本宮眺望
 一嚴魂神社圖
 一旭社圖
 一社務所表書院圖
 一同內景

一五
 一六
 一七
 一八
 二二
 二二
 二六
 二六
 二六
 三二
 三二
 三八
 三八
 四二
 四二
 四四
 四四

九

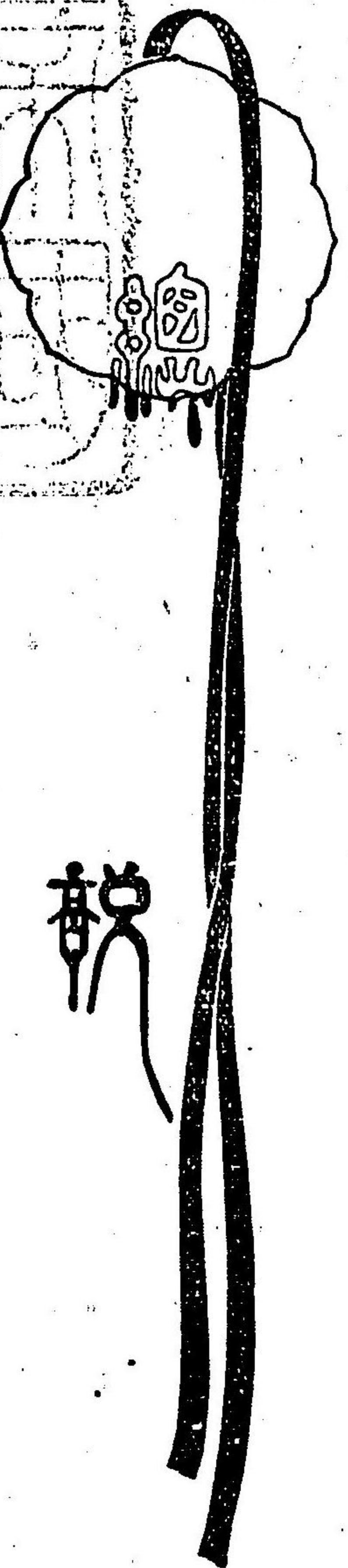
一 寶物館圖	五〇の二
一 青葉岡圖	五二の二
一 神事場圖	六八の二
一 鞘橋圖	七〇の二
一 高燈籠圖	七〇の二
一 國寶奈興竹物語繪卷の一部	八四の二
一 勅納御短刀圖	九〇の二
一 御料御硯箱圖	九〇の二
一 國寶辨財天圖	一一〇の二
一 國寶瀑布圖	一一〇の四
一 釋迦三尊十六善神圖	一一八の二
一 奥書院襖并床張附圖	一三〇の二
一 太刀圖	一五四の二
一 銅板涅槃像并貝石不動像圖	一五四の二
一 觀世音菩薩木像	一九〇の二

一 神輿圖
 一 十種香筥并古銅經筒圖

一 九四の二
 一 九六の二

第一章 總 說

○本宮概説 金刀比羅宮は香川縣讚岐國仲多度郡（舊名那珂郡といふ後多度郡と合併の名に改めらる）琴平山（一名象頭山）に鎮座あり國幣中社にして祭神は大物主大神なり永萬元年に至り 崇徳天皇を合祀し奉る謹みて國史を按するに大物主大神は 建速須佐男尊の御子 大國主神の和魂神に御座す夙に大八洲の國土經營に御心を傾けさせ給ひ農業殖産に漁業航海に百般の事業爲に大に興る後世其餘徳を被らぬはなし大神また英武絶倫にましまして國土大に治る經營成るや國を



擧げて天孫に捧げ給ふ神威赫々たる亦宜なる哉御相殿に鎮座す 崇徳天皇は
 鳥羽天皇の皇子に御座して諱は顯仁と申し保安四年正月寶算五歳の御時御即位あり
 しか永治元年十二月七日故ありて御讓位あらせられ保元元年の戦亂に際し當國綾松
 山に遷らせ給ふ九五の尊を以て松籟淋しく怒濤物凄き邊陲に籠居あらせ給ひしは畏
 しども畏き限り長寛二年御壽四十六を以て崩御まします 天皇御在世のみきり
 當宮を尊崇し給ふ事斜ならず長寛元年御參籠あり境内古籠所といへる地即此舊跡な
 りといふ崩御の翌年即永萬元年七月御靈を迎へて當宮の御相殿に齋き奉る實に今を
 距る事七百數十年なり。

大勳位晃親王

文秀女王

この神の大御光のかしこさは外國までも仰くとそきく
 大君の御代を八千代と瑞垣にいのる誠は神もうくらん
 ○沿革 當宮鎮座の年月等詳ならず明暦二年の舊記に垂跡已に三千年に垂んとす
 といへるあれど確實なる記録の徴すへきなきは遺憾とするところなり維新前は象頭
 山金毘羅大權現と稱し上古より衆庶の欽仰深きは素より歷朝 皇室の御崇敬亦甚
 厚く之を野史類に徴するに 後嵯峨天皇御宇寛元元年勅命を以て祭儀を修めしめ
 給ひ 一條天皇御宇長保三年には藤原實秋詔を奉して社殿鳥居を修築せるあり近

世に至りては寶曆三年十二月二十二日勅願所仰出され同十年五月二十日日本一社勅
 願所たるへきむね綸旨を賜ひ(八六頁參照)爾來御維新に至る迄毎年春秋二季禁中よ
 り御撫物を當宮別當に下して寶祚悠久を祈願せしめ給ふ 孝明天皇御宇文久三年
 三月四日臨時宣狀(八六頁參照)を賜ひ國家安寧の祈禱仰付らる明治元年七月特に宮
 號仰出され金刀比羅宮と御改稱あり四年六月國幣小社に列せられ十八年六月十四日
 國幣中社に御陞格あり其他十六年四月十四日には 天皇陛下より御思召を以て御
 短刀一口を勅納あらせられまた二十一年四月には當宮保存會設立の趣聞召され金員
 御下賜ありきさて御維新前には別當金光院兩部神道を以て奉仕せしか其後宮司權宮
 司禰宜權禰宜等の神官を置かれ後更めて宮司禰宜主典等の神職を置かれ以て今日に
 至れり。

玉藻よき讃岐の國は天地と神のみおももの足行むうまし御國と天下作たまひし大神
 のいてましの宮太敷す琴ひら山は天地のよろしき氣をは相得たるどころなれかも
 神からかこゝた尊く國からかそきら奇はし大宮は岩根こゝしき坂の尾を平して敷
 し大殿は雲氣かをれる山上にそひえたゞせれ目かゝやく黄金白かねうるはしく色
 どりよろひ世中の寶をつとへ國土の富を致して目もあやに作れるみれば大神のお

ほひたまへるみかけには何れの國か天のしたもれてはあるへきそこ故に四方の國
よりかふれるみたまのふゆのよろこひを聞えあけむとくぬかには人みちつゝき
海原は小舟つゝらきたゆといふ時なかるらし國中にみちたゝはせる大己貴神のみ
たまし尊くましけり。

穂積重胤

四



第二章 祭 儀

○祭典 當宮の祭典は最嚴肅を以て聞こゆ朝夕神前に於て神饌を獻し神樂を奏し
一日といへとも缺くる事なきは勿論大中小祭の外に臨時祭等屢執行せらるゝも重な
る祭日は左表の如し。

月 次 祭 毎月一日、十日、二十六日黎明

攝社白峰神社月次祭 毎月二十六日早朝

末社三穗津姫神社旭社月次祭 毎月一日早朝

五

末社嚴魂神社月次祭 毎月六日午前八時
 新年祭 一月一日午前七時・數歌奉奏
 元始祭 一月三日午前八時 倭舞奉奏
 忌籠神事 一月五日六日七日 七日倭舞奉奏
 中 一月十日午前七時 八少女舞奉奏
 攝社白峰神社大祭 舊曆正月二十六日 八少女舞奉奏
 紀元節祭 二月十一日午前八時 八少女舞奉奏
 祈年祭 二月某日午前八時 奉幣使參向
 中 三月十日午前七時 八少女舞奉奏
 櫻花祭 舊曆三月十日午前十時 大和舞八少女舞奉奏
 御田植神事 四月十五日午後三時 於神事場田舞奉奏
 攝社白峰神社小祭 舊曆五月二十六日
 小 六月十日午前八時 八少女舞奉奏
 大祓道饗祭鎮火祭 六月三十日黄昏 於神事場
 小 八月二十六日午前九時 大和舞奉奏

潮川神事 九月八日黄昏 神職行列を以て神事場に到り大祭に係る
 諸員の祓除を行ふ
 小 攝社白峰神社小祭 九月十日午前八時 八少女舞奉奏
 氏子祭 舊曆九月二十六日
 兩祝舍小神事 十月一日午前十時 八少女舞奉奏
 兩祝舍指合神事 十月一日 於祝舍
 大 十月六日七日 於祝舍
 紅葉祭 十月九日十日十一日 (次項参照)
 紅葉祭 舊曆十月十日午前十時 大和舞八少女舞奉奏
 天長節祭 十一月三日午前八時
 新嘗祭 十一月二十三日午前八時 奉幣使參向
 御煤拂御年木截神事 十二月十三日黎明
 除夜祭大祓道饗祭鎮火祭 十二月三十一日黄昏
 ○大祭 大祭は曆本に金刀比羅祭とあるものにして毎年十月九日十日十一日の三日に渉る大祭典なれば祭式の次第亦甚複雑なるも今之を略述せむに祭員一同は去る

九月八日の潮川神事に於て祓除を行ひ大祭三日前より潔齋して心身を清めさて十月九日午後四時祓除を修し次に本宮拜殿に於て神事執行八少女舞奉奏あり十日午前八時本宮に於て官祭執行奉幣使参向ありて國庫より幣帛を奉らる次に神主舞諸司舞を奉奏す午後四時に至りて神幸の祭式あり九時上次の頭人(二三頁参照)従者數百人を從へて参殿儀式あり十時神輿を中殿に進め更に神事あれども此神事は諸人窺ひ知るを得ずそれより神輿出御嚴肅なる行列を以て境外潮川神事場(六七頁参照)の行宮に渡らせ給ふ其行列の次第概左の如し。

上頭 人 男女各一人 男子は水干着用乗馬女子は千早衣着用乘輿男女

數百の従者之に従ふ (二三頁参照)

次頭 人 上頭人に同し (二三頁参照)

氏子 數百人 麻社衾着用

先拂 一人 角衣着用

御旅所世話係 數十人 禮裝

御神輿寄附人 數十人 禮裝

五人 素襖着用 (二五頁参照)

庄	官	數人 直垂着用 (一四頁参照)
鐵	杖	二人之を牽く、角衣着用
御鹽	水	鹽水行事員淨衣着用一人 同捧持員白丁着用一人
太鼓	鼓	附人淨衣着用一人 昇人白丁着用二人
祝舍掛神職		神職一人之に當る正服用乘馬社衾着用の従者四人及白丁
錦	箴	着用の傘持沓持各一人之に従ふ
神馬		二梳あり一梳毎に素襖着用の守護四人及白丁着用の昇人八人之に従ふ
御辛	櫃	平素御廐にある神馬にして概三頭なり一頭毎に係員二人及白丁着用の口取二人附添ふ
琴	箱	五差にして一差毎に守護二人昇人二人之に従ふ
巫女	女	一個 附添人右に同し
東遊舞	人	十數人にして各舞衣を著し手に櫛を持す
大和舞	人	四人にして各東遊の舞衣を著す
		四人にして各大和舞の舞衣を著す

樂太鼓 白丁着用のもの二人之を昇き直垂着用の伶人奏樂す
八人各直垂を著し鳳笙篳篥龍笛を以て太鼓と共に渡御の途上
行く行く奏樂す

太玉串 淨衣着用の守護一人及白丁着用の昇人二人之に従ふ

御鉾 二筋あり一筋毎に守護及昇人あること右に同じ

御矢楯 二枚あり一枚毎に守護一人捧持者一人従ふ

御弓 御矢楯あり御弓員御矢員淨衣着用之を捧持す
二口あり御劍員之を捧持す

啓行 淨衣着用一人

御醫 二本あり一本毎に守護一人捧持者二人従ふ

神輿 御綱員淨衣着用四人及駕輿丁白丁着用二十五人之に隨從す
(一九五頁參照)

御絹傘 白丁着用三人之を捧く

御絹蓋 守護淨衣着用二人及捧持者白丁着用四人之に従ふ

宮司 一人正服用乘馬す從者五人口取傘持沓持各一人之に従ふ

禰宜 一人正服用乘馬す從者四人口取傘持沓持各一人之に従ふ

主典 四人服裝從者右に同じ(内一人祝舎係神職に當ることあり)

町長 一人直垂着用乘馬す町役場吏員之に従ふ

神典講說世話係 數十人

列締跡押等 數十人

警護 數十人

上次の頭人には男女の從者數百人盛裝をこらして隨從す皆當地方の信徒なりまた高
松及各地よりは奴と稱へ毛槍を振り挾箱を擔ひて從ふ宛然舊諸侯の鹵簿を見るか如
し神輿の渡御は極めて靜肅にして數萬の拜觀者亦聲を呑み寂として人なきか如き中
を徐ろに進み給ふ

人なみの騒はどみに靜りぬ神の御こしや近つきぬらん 讀人不知

かくて午後十二時頃行宮に著御あるや引續き祭典執行神主舞四段諸司舞五段を奉奏
し盛むに燎火を燒きて夜を徹す

さしくしの曉近くなりぬれど大御まつりは半なりけり 琴陵保子

此時本宮に於ても神事あり翌十一日午前五時行宮に於て神事執行次に獻馬式、東遊

八少女舞あり次に崇敬講社本部の祭儀あり薄暮還幸式執行更めて八少女舞を奏し終りて還幸あらせらるる鹵簿の次第渡御の時に同し本宮著御の後大祭報賽式あり頭人殿に昇り神前に於て神事を行ひ次に伶人解齋歌を奉奏し大祭全く終る

わらんぢに木の實はさるや金毘羅會

獅子窟道人

○櫻花祭紅葉祭 櫻花祭は毎年舊曆三月十日又紅葉祭は同舊曆十月十日執行あり當日早朝祭員伶人巫女等祭に係る諸員境内崇敬講社本部に參集し唐櫃をはしめ諸調度品に櫻又は紅葉を挿立て祭員等は冠烏帽子に之を簪し巫女は手に手に折枝を持ちて午前十時出門鹵簿を整へ本宮に到る(當日雨天ならば行列なし)かくて本宮に於ては神饌品はもとより諸祭具調度品等にも櫻あるひは紅葉を装ひ特に拜殿正面の結界を撤し優雅なる式典あり大和舞八少女舞を奉奏す諸作法平日と較趣を異にして實に優美温雅なる神事とす

琴平のおまへの春日のとかにて花をりかさす神の宮人

井原義矩

はふりこか立まふ袖に色そへて御階の上に散る紅葉哉

琴陵瑞枝

○御田植神事 毎年四月十五日(雨天順延)午前十二時祭員一同本宮に參集御田植神事奏上式を行ひ次に豫て御協間に備へたる神事用農具を出し召立員諸員を呼び

て順次之を渡すそれより係員一同行列を以て境外神事場に向ふ次第左の如し

先拂 御辛櫃 御鍬 御鋤 御馬把 御地鍬 御苗籠 御琴 巫女 伶人 梓差 準備員

一行神事場に著するや午後三時より神事を行はる先鹽水行事散米行事降神式を終へて八少女舞奉奏次に鍬行事鋤行事犁行事馬把行事地鍬行事次に苗長の田植作法あり苗長は主典之に當る次に田舞歌四曲を歌ひ巫女の田舞あり此舞は巫女の務むることころなれとも八少女舞とは大に趣を異にし一同白衣に緋の袴を穿ち緋の襷をかけ古雅なる笠を戴き婉雅なる手振を以て夕陽斜に十數の老松陰を落せる白砂の上を右往左往に演奏するものなれば遠近の老若男女之を拜觀せんとして來集しさしも廣き齋庭もなほ狭きを覺ゆさて演奏終るや巫女は神前に備へたる切餅を撤し參集人に投與し係員は各地より集れる數十の牛馬に向ひ白幣式を行ふ次に昇神式ありて祭儀終を告げ一行再行列を以て本宮に歸へる農家は此日神前に備へたる粃種を請ひうけ之を他の種子に交へて播種し本年の豊作を祈るもの多し

苗代に水ひき入れよ琴ひらの齋種祭はけふそつかふる

水野秋彦

○頭人 頭人の起源に就きては確説を得ざるも御維新前にありては國司松平氏よ

り其乗馬を頭人の乗用に供しまた特に家臣を派して幹旋せしめたり頭人の行列には毛槍挾箱等ありて先驅は鐵杖を引き下座を呼ひて警蹕をなす等祭事中は特に舊諸侯に准したるか如し頭人は上次の區別あり各男女一人宛即男二人女二人にして皆頭屋家筋の幼童之を務む頭屋家筋は當郡五條榎井四條苗田四個村に約七八十軒あり其幹旋に當るものを庄官と稱し其家筋亦數軒あり毎年前記四個村中より二個村當番として祭事に當る其當番の村にありては村内清淨の地域を選ひて祝舎建築地に充て當宮神職出張祭儀を行ふ其次第を説かむに八月三十一日九月一日に口明神事執行九月二日三日に地鎮祭執行祝舎建設に著手數日にして工を竣へ同八日潮川神事に於て頭人修祓を受け翌九日祝舎御幣立神事あり十日十一日には泊始神事と稱へ當宮祭員祝舎參籠始の式あり十月五日七日指合神事執行此時明年の頭人を定む十日十一日の大祭に當り頭人祭儀に與り神輿に供奉する事前に説けるか如し十一日神輿還幸後御幣降神事あり十四日は頭人三日參の式十五日は祝舎焼拂神事を執行當年の行事終るものとすさて祝舎は頗古雅清素なる建物にして古來一定の法式ありて變ることなし式典亦甚温雅質實にして古式の一般を窺ふ事を得へし。

○東遊 東遊は一に駿河舞と稱し四人の舞人卷纓の冠を戴き柳葉を簪し紅重菱單

東遊



少女秘曲舞



大和舞

八少女舞



黒半臂桐鳳青摺小忌を著赤の下袴に緑の上袴をかさね虎皮の尻鞆したる太刀を佩きて演奏す舞曲極めて雅健壯重なり毎年十月十一日神事場に於ける大祭式場にて之を奏す。

○神主舞諸司舞 大和舞の内神主舞は舞人垂纓の冠を戴き日蔭葛を簪とし紅重菱單紫半臂松鶴青摺小忌を著赤大口白窠蔽の表袴を穿ち蒔繪鞆衛府の太刀を佩き袖を手にして演奏す同大和舞の内諸司舞は四人にして装束は概神主舞のものに同じきも冠は巻纓にして半臂は黒太刀は虎皮の尻鞆したりまた表袴は白の無紋なる等の差あり舞の手振は神主舞と趣を異にす神主舞は十月十日早朝本宮拜殿に於てまた同日夜神興行宮に著御の後其神前に於て奉奏す諸司舞は一月三元始祭の節同月七日忌籠神事の竟日舊曆三月十日櫻花祭の節八月二十六日小祭の節舊曆十月十日紅葉祭の節十月十日早朝大祭の節等本宮に於て奉奏しまた十月十日夜行宮に於て之を奏す。

敷しまの國の名に負ふ倭舞やます舞はなむ神の御前に 正七位古川躬行

○八少女舞 八少女舞奉奏中一人にて奏する場合と數人なる場合とあり前なるは紅重菱單五衣を著し緋の長袴を穿つ後なるは五衣に代ふるに舞衣を以てし緋の切袴を著く一月十日三月十日の中祭二月十一日の紀元節祭舊曆三月十日同十月十日の櫻

花紅葉の兩祭其他大祭は素より重なる諸祭典に當りて奉奏す(前記祭典表に詳なり)
また信徒の請求に應じて臨時奏進することあり。
振袖のかへすくも若えつゝ仕へ奉らへいや少女にて
正七位古川躬行



第三章 境 内

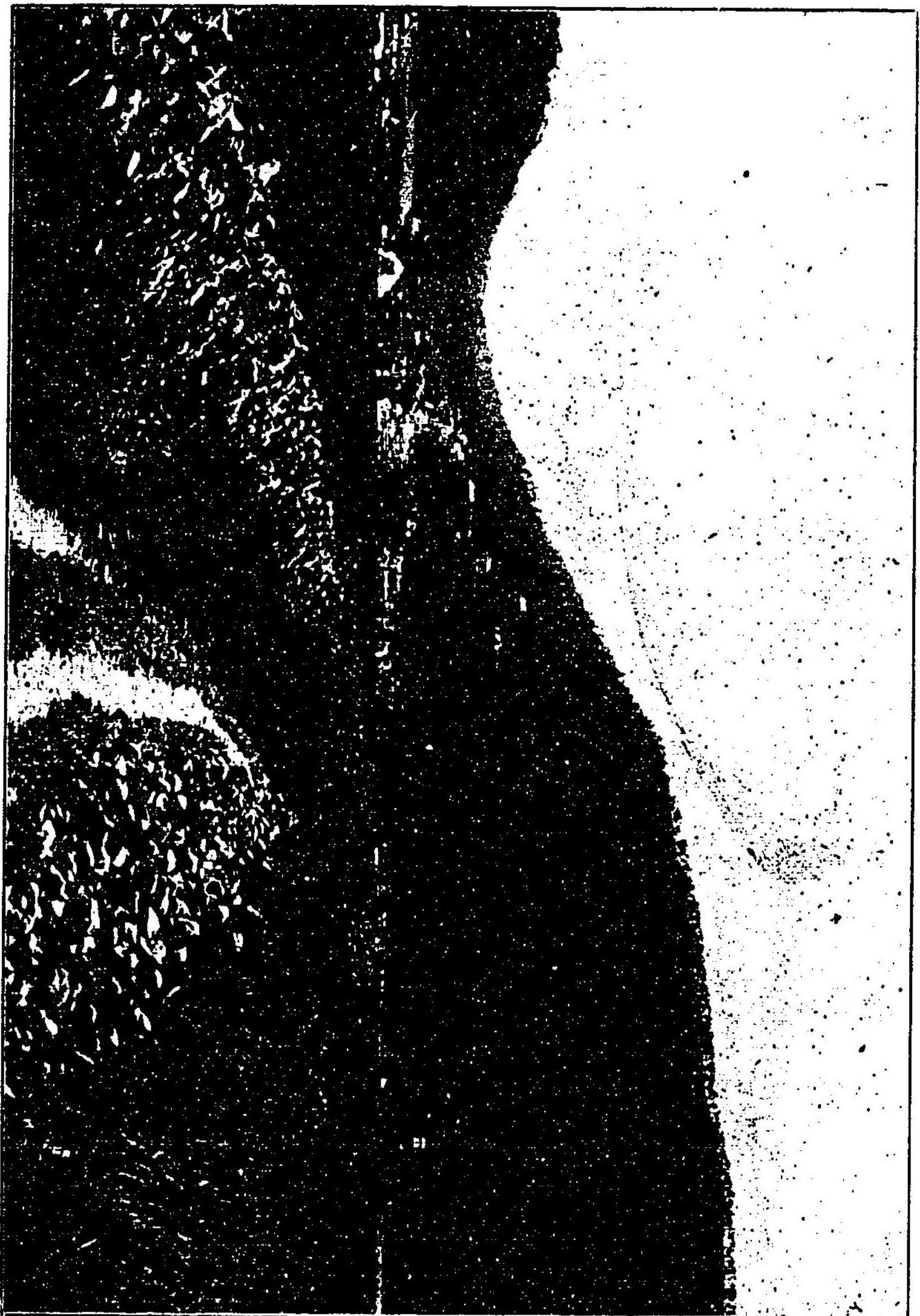
○琴平山 琴平山は即金刀比羅宮の鎮りませる神山にして形の似たるより象頭山
と稱せらる往古より濫りに斧を入れざるを以て全山樹木鬱密翠色滴らんとし眞に太
古の俤を存する稀有の靈境なり。

神のます琴平山の月かけに曇なき世のひかりをそしる 大勳位貞愛親王

香火遠來人風光勝絶處詩思殊不凡應有山靈助

筱崎小竹

玉顔高聳海南天佳氣晴浮萬古煙知是神仙來相會一聲飛鶴白雲邊 中村景敬



琴平山(象頭山)遠景

常磐木のなほ茂るなり象頭山

沖からも拜す茂りや象頭山

月はなに仰けは高し象頭山

夕の霧は山麓をこめて弦月ほのしろく峯の松にかゝれるときは即詩人の吟情を制する能はざる時なるへし。

しらへすむ琴平山の山松にかゝるもたかし夕月のかけ

澄江如練散餘霞水木湛然清且華自古謝家傳絕唱象頭山上月磨牙

進香人影散仙龜畫鼓逢々隔夕嵐眉様何如牙様好象頭山上月初三

三日月や牙とぎ出だす象頭山

秋霜一たひ結へは山腹到るところ松茸を産す香味殊に佳なり。

小林の菊のみ秋の香かはおとろか露もいさや分け見む

小林に生立笠は秋の雨の晴れて後こそとるへかりけれ

霜落千林葉漸黄看山閑坐與方長秋畦鷄熟嘗新早更喜雨餘松茸香

松色染來羅綺青織々采々小於釘蕭郎拾得傘如大歸路未妨逢雨零

萱類詳載陳氏牒松茸爲王他臣妾赤松陰處秋正深以北以西雨澤浹慣行樵豎不易尋初

三

丈 松 鼎
翠 露 左

子爵福羽美静

森 春濤

神波即山

與謝蕪村

本居豊頼

本居豊頼

金光院宥怡

森 春濤

生歷歷戴落葉其貴蕊珠迥讓之素潔芳香韻味協象山奇勝冠四州後林產萱草相接大者尺許小三寸柄如鼓槌堪俯捻纒經數日傘便開或欹或直層又疊賽神人作采萱人林蹊高下忙移屣我題此圖歎吾衰海山千里難跋涉只期秋窓夢一場凝望松林色浮頰 題後

林採萱圖

大沼枕山

當山は海拔千二百八十尺總反別百九十一町六反二十六歩にして其内當宮境内は百一町二反一畝七歩また當宮所有山林は八十二町二反十五歩なり殘餘の八町一反九畝七歩は琴平公園とすさて旅客の爲に參拜の順路を逐ひて境内を説明せむに琴平町の内町を西に登る事數町にして人家盡くるところ正面二層の樓門巍々たるを望むへしこれより當宮境内に入るものとす此樓門は所謂

○大門 にして慶安二年當國高松城主松平讃岐守頼重の再建寄附にかゝる二重入母屋造瓦葺建坪二十五坪餘樓上に掲揚せる琴平山三字の額は有栖川宮熾仁親王の御筆なり門に向ひて左方なる樓を

○鼓樓 とす二重入母屋造瓦葺建坪六坪餘樓上時鼓を備へ晝夜時を報す。

まつ風もこゑうちそへて神山の高き鼓の音ぞきこゆる 文學博士小中村清矩
鼓樓の東方に塚あり之を

○清塚　とす清塚は即清少納言塚の略稱にして傳云寶永七庚寅の年五月鼓樓建築にあたり工夫とも過ちて塚石を壊しけるに其夜附近に住める大野孝信といふ人の夢に宮女來りて、うつゝなき跡のしるしを誰にかは問はれしなれと有てしもかな、といへる一首の和歌を詠すと見て覺めぬこれ清女の靈來り訴るなりとて時の別當職に申しければやかて懇に塚を修めぬ云々いま黒柵を圍らせるもの即これなり。

清姬舊跡少人知櫻樹林邊一片碑日暮東風花似雪憶佗鳳閣捲簾時　日柳柳東
天保十五年傍に碑を建つ其文に曰はく

一條帝皇能大后上東門院丹奉仕例理之少納言廼君者清原元輔之女奈理邪利故宮中仁爲天清少納言等序言鷄流此君伊吳竹之世乃人人廼八重雲隱利鳴神之音母動響爾聞知留事之如久村肝心風雅仁正久直久清久賢久副爲豆歌讀事波其世仁類布人希丹昔波唐土之母皇國之母落隈無久洩隈無久白銅鏡眞清久見爲明米天其道乎職止爲成男子由理毛異仁物識理之手弱女仁古曾於是玉藻吉吾讚國成象頭山止云山仁千引岩鎮理座大御神乎拜祭金光院等云寺之時守鼓打鳴櫻側仁此君廼與柳處也鷄理止石上古代欲利樛木廼言次來而在塚祁理此峨名乎清少納言塚止奈母言奈流御代之號乎寶永等言鶴間此高支家乎將作登爲氣流仁立民等我心母無久此塚能疊留岩乎蹴波夫羅

志志乎其夜當利近久家居祁類人乃夢丹佳人來天宇津都奈幾阿登廼志瑠肆袁多例仁智波斗波禮自那連杼安理天之母我難等云歌乎言豆其塚乎然爲鶴事之憤寸慨寸情矣止見津止序此人之裔孫今波他處爾開花能移比去天住例杼其人家袁猶告茶屋止波言那利綾異寸鴨綾奇寸鴨故如此異寸奇寸事波更仁母不言右毛在左毛在上於所謂空數不凡在君之與柳處止之泉郎之苅藻廼假丹毛言婆阿夫佐夫可也母不治在可也母止此寺篋主僧宥默大僧都此度燒太刀能利心梓之弓腹振起豆此塚之由緣矣本末淺茅原委曲仁書誌豆如此碑乎立鶴丹奈母　天保十年餘五年三月高松藩士友安三冬撰　標篆
松原義質謹書　碑文庄野信近謹書

此清塚及鼓樓に對して

○金刀比羅本宮崇敬講社本部　あり講社に加入せむとする人は此所又は講社定宿に申出つれば講社係員または定宿に於て其手續等懇切に説明すへしと雖要するに講則によりて講社加入の初穂金等を納入するときは本宮拜殿の殿上に於て親しく參拜するを得なほ講社御守は素より相當の物品を授與せらるべし當本部の建物は明治十年の建築にして總建坪百八十七坪なりさて大門を入るときは道の左右に飴店あり古來五人の百姓と稱へ當宮に對して特別の由緒ある家柄なるを以て門内に開店するこ

とを特許せられたるものにして參拜者の土産として之を購ふもの少からず更に進め
は石の注連柱ありこれより西一町餘の間を

○櫻の馬場 といふ中央の通路は石にて疊み左右玉垣の内には數十株の櫻樹を植
ゑ其間に無数の石燈籠を羅列す日影長閑けき春のあしたなど爛漫たる花は左より右
より枝を交え濃き淡き花のいろく妍を争ひ美を競ふ花より出て、花に入るとはこ
れをいふか。

犬塚興恕

咲艶ふ花は大路の關ならん往さも來さも人しとむれは
花を世にもてはやさるゝ象山の春の盛に逢にける哉 御歌所長男爵高崎正風

日射山門挑瑞光群櫻挾路直成行怪看三月春風下萬點繽紛白雪香 熊谷立閑

雁列森々護道場披霞吐玉帶春粧諸天作樂還相助花雨繽紛散法王 清國人雷音博

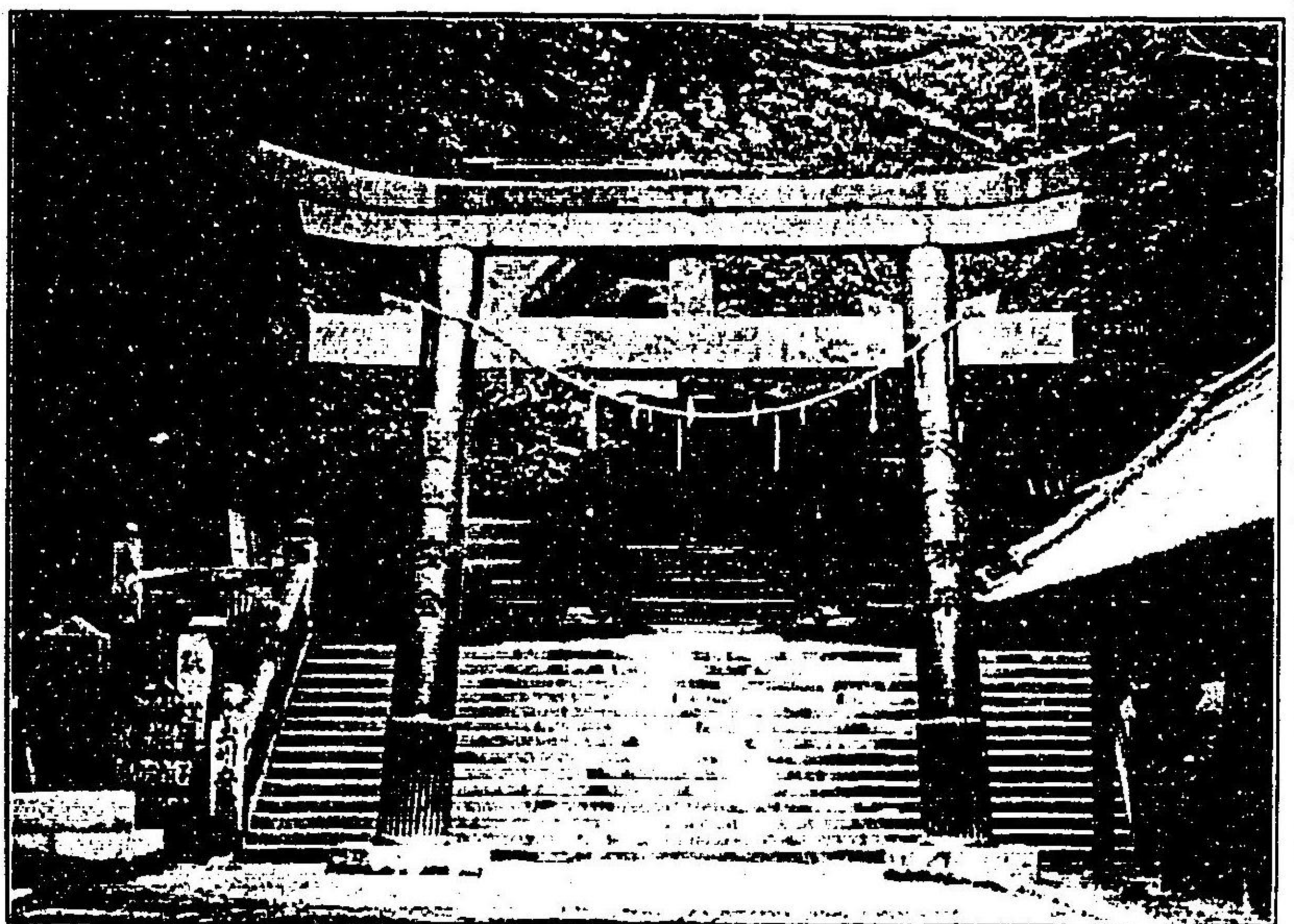
地靈春物絕塵氛夾路山櫻開十分一段風光轉迷望左邊如雪右邊雲 前南禪寺東笠

吳隊二姬笑鄴宮千騎粧花顏誇國色列對護春王 弘文院學士林春齋

升山歩々高夾路櫻花陣鱗甲霞間明香威風裏振 皆川淇園

一對花爲陣爭研紅白粧魏姚非國色將爾可稱王 萬年山主祖縁

祠事鱸稱三月盛國家長壽泰山安春風滿殿花吹雪人袂如雲上石壇 森 春濤



谷口春酣紅映霞祠前祠後匝櫻花香風拂地人如玉一隊女兒停寶車 矢土錦山

船ころろさめけり花の象頭山

星 谷

櫻馬場を進みて右手に一段高き岡ありこれを

○青葉岡 と稱し各種の樹木數百種を植ゑ四阿あり噴水あり牀あり參拜者遠來の勞を慰すると共に知らすく植物上の智識を得へき設備なり(五二頁參照)此岡に

○寶物館 あり石造二階建の堅牢優美なる建物にして館内には數百の寶物類を收藏し相當拜觀料を徴して拜觀せしむ本館(四九頁參照)并に青葉岡に就ては第四章に詳なるを以て茲に之を略すさて再櫻馬場に出て西に向ひ石の鳥居をくくり石階十數級を上れば左正面に

○御廐 あり入母屋造瓦葺建坪十一坪にして神馬三頭を飼養すそれより更に西すれば右手に社務所あれと此説明は歸路に譲り道は其門前より左に折れ正面に

○茶堂 あり寛政九年大坂戎橋大和屋彌三郎外講中の寄附にして入母屋造瓦屋根建坪十坪餘なり參拜者はこの處にて隨意に休憩して茶を喫することを得茶堂の東に

○木馬舎 あり入母家造瓦屋根建坪十八坪餘慶安三年當國高松城主松平讃岐守頼重の寄附にして内に木馬三頭を納む最大なる一頭は京師大佛師田中環中齋弘教宗圓

の作なりさて舎前の石階を上れば右に黒門ありこれを社務所の正門とす更に西すれは地開けて三棟の社殿あり東なるは末社

○祓戸社 にして、瀬織津姫神、速秋津姫神、氣吹戸主神、速佐須良姫神を祀る參拜者は此社前に於て身心の祓除を禱るへし本殿流造檜皮葺、拜殿入母家造檜皮葺拜庭なり其東に漱水場ありこれに近く芭蕉并に古帳女の句碑あり左の如し。

花の陰硯にかはる丸瓦 芭蕉 天の川くるりくと流れけり 古帳女
頭からかふる利益や寒の水 古帳女

この句碑に對する燈籠二基の表に常夜燈の三字あり大窪詩佛の筆にして裏面に其署名あるを以て名ありさて祓戸社の東に隣りて

○旌烈碑 あり明治十年西南戦役に關する忠烈表彰の碑にして題額は陸軍少將高島鞆之助（後中將に任し子爵に列せらる）撰文は陸軍大佐黒木爲楨（今陸軍大將男爵）筆者は岡田東州なり文に曰はく

維明治十年二月西郷隆盛等反而舉兵圍熊本城、朝廷下征討之命以二品熾仁親王爲征討總督討之、官軍將士與賊戰於肥後植木山鹿等之處時賊初起勢甚猖獗、王師屢苦戰外援斷絕熊本城爲孤立少將谷干城君抗睢陽之節備禦甚力因得不陷焉於是

廷議更編別働旅團以援之讚之圓龜營所屯步兵第十二聯隊先是以 天使護衛在薩地至是爲之先鋒赴援取道於日奈久迂廻而進以衝賊之背後轉戰于各處而所向多克捷終至城山之役克收戡定之績其功最居多然而中隊長石川敬儀以下墜命於鉞鏑之際者百九十八名矣嗚呼西郷隆盛也者倔強善戰加以狡詐如或遲緩則雖積歲月未易蕩平然而半載之間漸滅無遺類雖賴

聖天子之威靈諸將帥之籌策亦因此輩之敢勇奮闘者也夫人之稟斯生也欲將立忠孝之大節爲國家有所毗補耳聖學極致止於成仁取義也其方在此世也雖遲數異無同不有一死縱籌至期願徒能飽食煖衣與艸木同朽與禽獸同斃而無寸功之可稱則此天地間之大盡矣何榮之有此輩能捐性命致報效於國家人臣之常分丈夫之至榮也豈可不稱贊哉按祭法以死勤事以勞定國能禦大患此皆在當祀之列且屈子所謂首雖離兮心不懲誠既勇兮又以武魂魄毅兮爲鬼雄者英爽不昧而必不朽矣然而其名湮沒不傳則良爲可惜矣余也以不肖辱十二聯隊長坂井少佐以第一大隊長同行俱與其攻戰目擊熟知因相與謀與有志輩協議戮力建碑於琴平山少將高島鞆之助君題曰旌烈碑一以慰其英靈一以爲將來之勸云

銘曰嗟茲多士敢闘殞身義堅金石命輕埃塵克盡臣節以叙彝倫英靈不滅令名長新

明治十二年第一月一日 陸軍大佐正六位勳四等黒木爲楨撰 熊本縣士族東州岡田徳尙謹書

さて碑の東方に

○東宮行啓記念松 あり去る明治三十六年十月十三日 東宮殿下御參拜のとき社務所奥書院に於て當山の松藪を稚松と共に盆栽としたるものを台覽に供へたるに御興感斜ならずやかて御思召によりて記念の爲其稚松を植ゑたるもの即これなりさて祓戸社の西なるは末社

○火雷社 にして、火産靈神、奥津比古神、奥津比賣神を祀り、八衢比古神、八衢比賣神、來名戸神を合祀す社殿流造檜皮葺なり社前の石階を上れば正面に雄大壯麗なる旭社々殿あり此説明は歸路に譲り右すれば西に面して

○長廊 あり流造瓦葺長十八間幅一間半建坪二十九坪餘嘉永七年の創立にして其後再三の修築を經現今のものは明治三十四年改築せるものなり長廊に對して水屋ありこれを左に見て唐銅の鳥居をくゞれば

○賢木門 に到る唐破風と千鳥破風の棟を交錯せる檜皮葺屋根にして建坪約五坪結構敢て壯大ならさるも其様式他に多く類例を見さるのみならず各部の權衡宜を得

優麗温雅以て建築家の參考たるへし賢木門三字の扁額は有栖川宮熾仁親王の御筆なり抑此門の緣由を尋ぬるに天正十二年長曾我部秦元親兵亂を起し諸州を侵略し勢甚旺盛四隣皆威服す此時に當り神社佛閣の兵燹にかゝるもの甚多し元親一日當山の北隣大麻山に於て當山を後にして陣取りたるに其夜元親俄然狂亂して當山の草木悉く敵兵と見え周章狼狽爲すところをしらす老臣等以て靈境附近を冒したる神罰となし恐懼罪を謝せむかためにわかにかに衆を集めて二天門を境内に建築せりかくして元親の狂亂は治まりしかと建築を急さし爲誤て一柱を逆用せり爾來俗に逆木門と稱す。

秦家兵火燒南國珠閣香臺殘礎存當日免災唯此廟神威高耀二天門 日柳柳東
明治十二年朽敗の故を以て此門を壊ち逆木の柱は記念の爲社務所に收め(二〇四頁参照)更に素潔温雅なる今の門を建築したるも猶舊稱逆木の音を假りて賢木(さかき)門と稱すさて此門を入り右に

○遙拜所 あり、皇廟皇陵を遙拜するところとす神籬殿及拜殿は流造檜皮葺にして共に明治十三年の建築なり拜殿の左右なる石製高麗狗は極めて温雅優麗なる製作にして此種の參考品たるへしさて遙拜所を經て數十歩の間を俗に

○關峠 といふ樹木蒼鬱畫猶暗きを以てなり此處に來れば心氣自ら澄み幽邃清爽

いふへからす

讀人しらす

神垣の杉の村立夜はふけて風にまたくみあかしの影

從七位大木眞備

千早振神の御代より繁りけむいつのおほ樟いつの鉾杉

和紀醉石

もしそれ杉の木の間をまれて本宮の古樂朗々たるを聞かは實に羽化登仙の思あらむ

緑樹蔽幽谷満山嵐氣深時間天樂奏餘韻度雲岑

さて此境を進めば石橋ありこれを

○連離橋

といふ玉垣を連ぬるの意なり橋を渡りて正面なるは末社

○眞須賀神社

にして、建速須佐之男尊、奇稻田姬尊を祀る社殿入母家造檜皮葺なりこれより西に向へは石階四段に分れ各十數級にして本宮に達す此石階を

○御前四段坂

と稱す、さて坂を登り右に末社

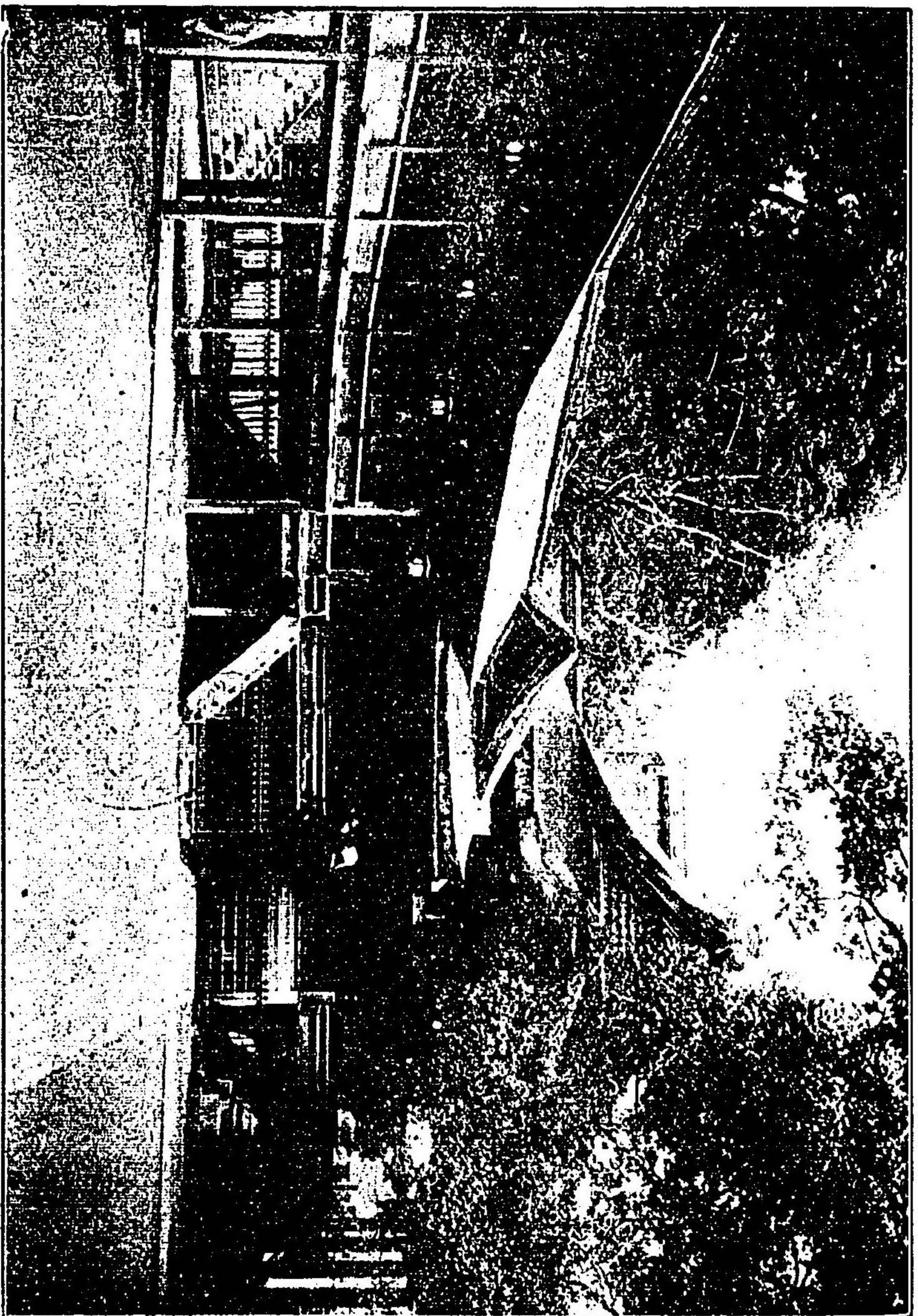
○御年神社

あり、大年神、御年神、若年神を祀る社殿流造檜皮葺とす次に末社

○事知神社

あり、積羽八重事代主神、味鋤高彦根神、加夜鳴海神を祀る此三柱

の大神は本宮御祭神の御子神に座す社殿流造檜皮葺なりさて更に石階を上る事十數級本宮拜殿に到る右に水屋あり流造銅葺屋根にして飲料用水道の鐵管によりて絶えず清淨なる手洗水を噴出す。



金乃比羅宮本宮

○本宮 御祭神及祭儀に關しては第一章及第二章に述べたるを以て之を略す抑本宮社殿の創立は上古に屬し典籍の徵すへきなし中古に至りては今を距ること約九百年前長保三年藤原實秋 一條天皇の勅を奉して改築せり其後元龜四年の改築天正年間長曾我部素元親の再營を経て萬治二年當國高松城主松平讚岐守頼重之を改築したりしも歲月を経るの久しき頽廢に傾きしかは明治十一年に至りて現今の社殿に改築せり本殿大社關棟造檜皮葺建坪九坪餘にして凡て素潔を主とし檜の無節を選び丹青を施さず左右御壁板には櫻樹圖高蒔繪を施し其花には金銀の金貝を用ゐる燦爛人目を奪ふ透塀を隔て、外部より其一般を窺ふ事を得へし中殿檜皮葺建坪九坪餘にして拜殿は大社關棟造檜皮葺建坪二十六坪餘なり共に檜の無節材を用ゐる柱一雙千金を値するものありといふ拜殿天井は格天井にして花卉の金蒔繪を施し向拜には金色鮮なる菊花御紋章を附す當社殿の枳料は凡て角材を用ゐる一切弧をなさざるは他に類例を見ざるどころなり何人ぞ雖拜殿正面の椽上に於て親しく拜するを得へく殿上に昇るは特に昇殿拜を許されたる人及崇敬講社條例によりて昇殿し得へき資格を得たる人に限る社前には參拜者常に絶えず殊に春期の如きは肩摩立錐の餘地なきに到る。

象首山青新緑天神仙垂迹幾千年梵鐘一夜不鳴止知是旅人訪廟前 金光院宥怡

白布衫兒帶落暉象頭山上進香歸黃昏一雲神靈雨馬尾輕塵濕不飛 梁川星巖

(右二篇は御維新前の作なれば今日の情況に適せざるもあるへし)

來拜象頭山上祠石階高處入雲危寒鴉無數啼神樹似向信人怨昔時 伯爵井上馨

摩天雄嶺拔郊坳古廟樹深燈影清淑所鍾神所在奉持皇運鎮南溟 三島中洲

金比羅殿鎖金陵士女如雲遠近登畫鼓青鐘新調少玄冠白服古風興曉曉雲霧生衣袖春

日香煙埋石磴赫々千秋神德現天長地久屬年徵

韓國人 黃鐵

玉藻よき狹貫の國に名も高き象のおやまの峯にます神

蜀山人

中殿入口の左右に備へたる大花瓶一雙は寶玉七寶燒にして神戸の人從六位勳五等川崎正藏氏の献するところ也初川崎氏七寶燒花瓶及香爐を製せしめ之を佛國巴里萬國博覽會に出陳す偶來觀の希臘皇帝陛下之を見給ひて嘆賞あらせられ屢讓與せむ事を求めらるゝも氏は我 帝室に献納の意あるを以て應せず歸朝の後之か献納を了し更に同一物を製して當宮に寄附せるもの即是なり其一雙の爲に費すところ萬金に上ると云(一九九頁參照)さて本宮前の急坂に

○竹林 あり枝幹甚壯美にして人の嘆賞するところなり獨本宮前のみならず當山各處竹林多く古來後前竹園と稱し詩歌に乏しからず。

むら竹の青垣なして神在す山には塵をかくへくもなし

犬塚興恕

千竿碧玉鬱相叢望後望前覆上穹天性虚心抽操節傑然克保七賢風

熊谷立閑

前是洪園後渭川千竿圍院帶風煙更無向背令人俗不訝斯中栖七賢

前天龍寺文禮

翠篁園象嶠六月得涼多若使提婆到截枝作舍羅

萬年山主祖緣

山上多真氣後前修竹園時訝儼儼衛青雲擁翠微

皆川洪園

山後綠千竿山前綠萬竿風塵侵不得鸞鳳托身安

藤澤南岳

脩竹拂塵氣四圍翠影橫襲人風一陣進退有鞭聲

和紀醉石

本宮の南に接して

○直所 あり入母家造檜皮葺にして本宮詰員の宿直する所とす神僕を献せむとする人はこの所に申込むへし。

櫻さく琴ひら山にとのゐして花にこもれる神のみや人

水野秋彦

直所に對して

○神樂殿 あり入母家造檜皮葺建坪十坪餘なり祭典に際し伶人樂を奏し或は信徒の求に應じて巫女及樂人神樂を奏するところとす其南に隣りて神樂受付所及出張神札所あれば神樂奏進を求めまたは守札授與を望む人は此所に申込むへしさて附近の

説明は後に譲り再び本宮前に出て北方を

○眺望 するに風光極めて絶佳にして足下は断崖十數仍脚踏隈なく繁り合ひて地を見るによしなく岸より生ひ出てたる石南には嵐氣深し杉樹亭々として黒すみわたれる一叢の森を越えて翠滴る松栢の枝を列ね葉を重ねたる青羅の上より近くは村落のかしこに一軒こゝに一棟數株の常磐木に圍まれて春は黄なる緑なる圃の間に秋は赭色の水田に點々散在して地上の松島を望むか如く讚岐富士なる飯山は倒扇の姿うるはしく泰かに引きたる裾のあたり炊煙ゆるくな引けるに冬のおしたなと時に峰頭雪を戴くあり。

落木江天雁影横荒涼無復野蟲鳴曉來忽覺新空峭小富山頭薄雪明 岡本黄石
遠くは備前備中の諸山淡くして夢の如く波靜なる海上に眠り丸龜のあなた霞こめて
白帆ノ見えみ見えすみするあり眞に是絶好の畫圖か

無數輕帆筆海天春風影映港門烟隨潮歸去隨潮到多是象山香客船 金光院宥怡
圓龜城背海光明五夜先看曙色生非擬柿翁朝霧咏霞間隱見遠帆行 森 春濤
賽神人泊短篷中檣影森々滿港風落後一船來遠浦殘霞燒海暮帆紅 松原竹秋
もしそれ雪降りて滿山銀界となるときは琴平山の山嘴たる祖谷愛宕の諸峰をはしめ

群嶺の青松白絮を戴き六出の華續紛として寒風に翻る

みねつゝき秀し松のかげだにも看えぬや雪の曙のそら

犬塚興恕

層出半空千萬峰一朝白盡雪重々此中定有神仙住頃刻花開幾樹松

熊谷立閑

萬嶺千山一帶青貞松圍繞作翰屏有時一變皆成玉鶴唳霜寒顯地靈

清國人雷音博

冬朝望群嶺萬松帶雪開呈茲林色白坐訝近蓬萊

皆川淇園

密松擎淡雪青裡白依稀便知新晴曉群仙晒羽衣

藤澤南岳

戴雪喬松聳翠間白一堆豫峰還讀嶺代送瑞光來

和紀醉石

さて此風光に別を告げて西すれば本宮に續きて

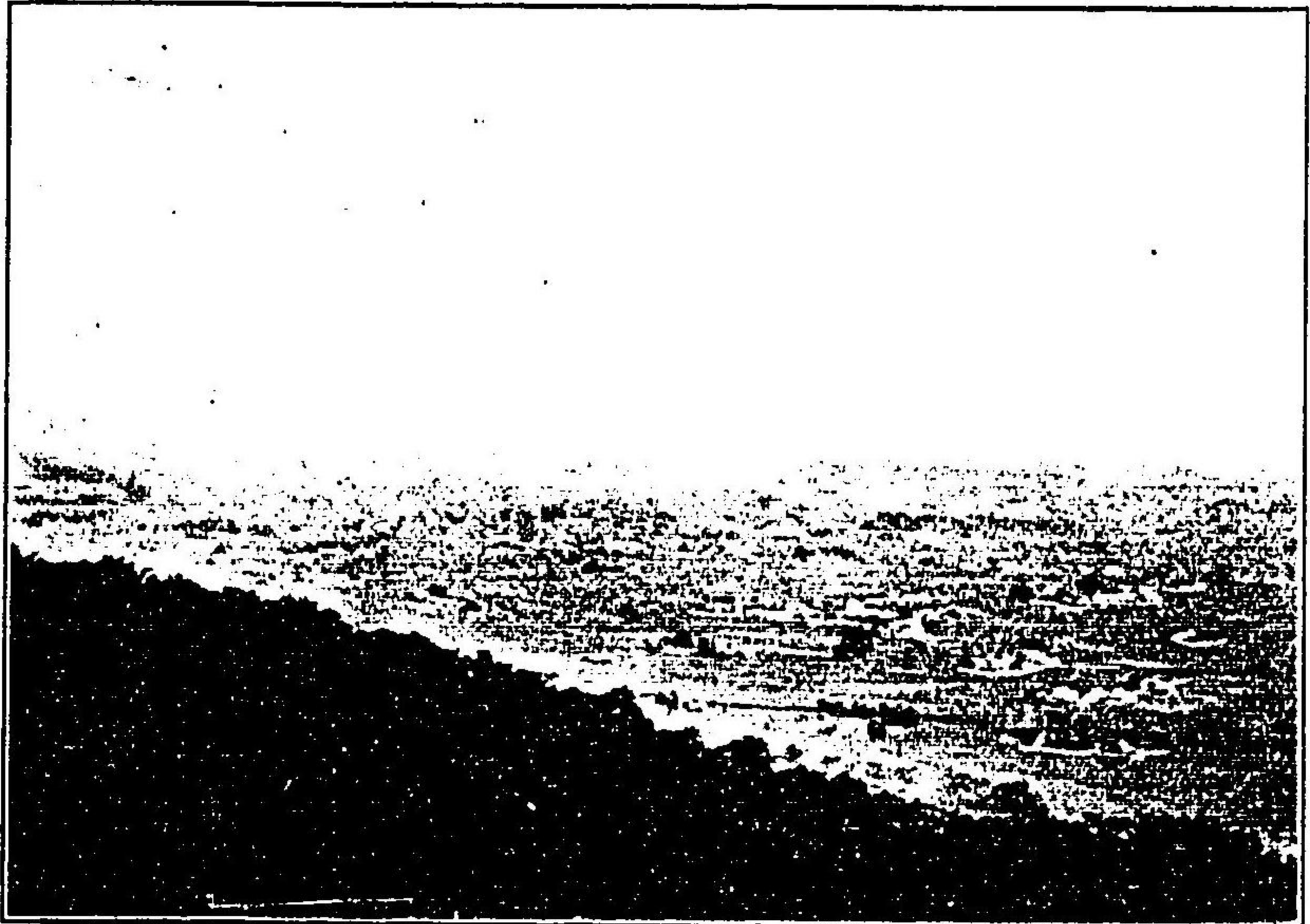
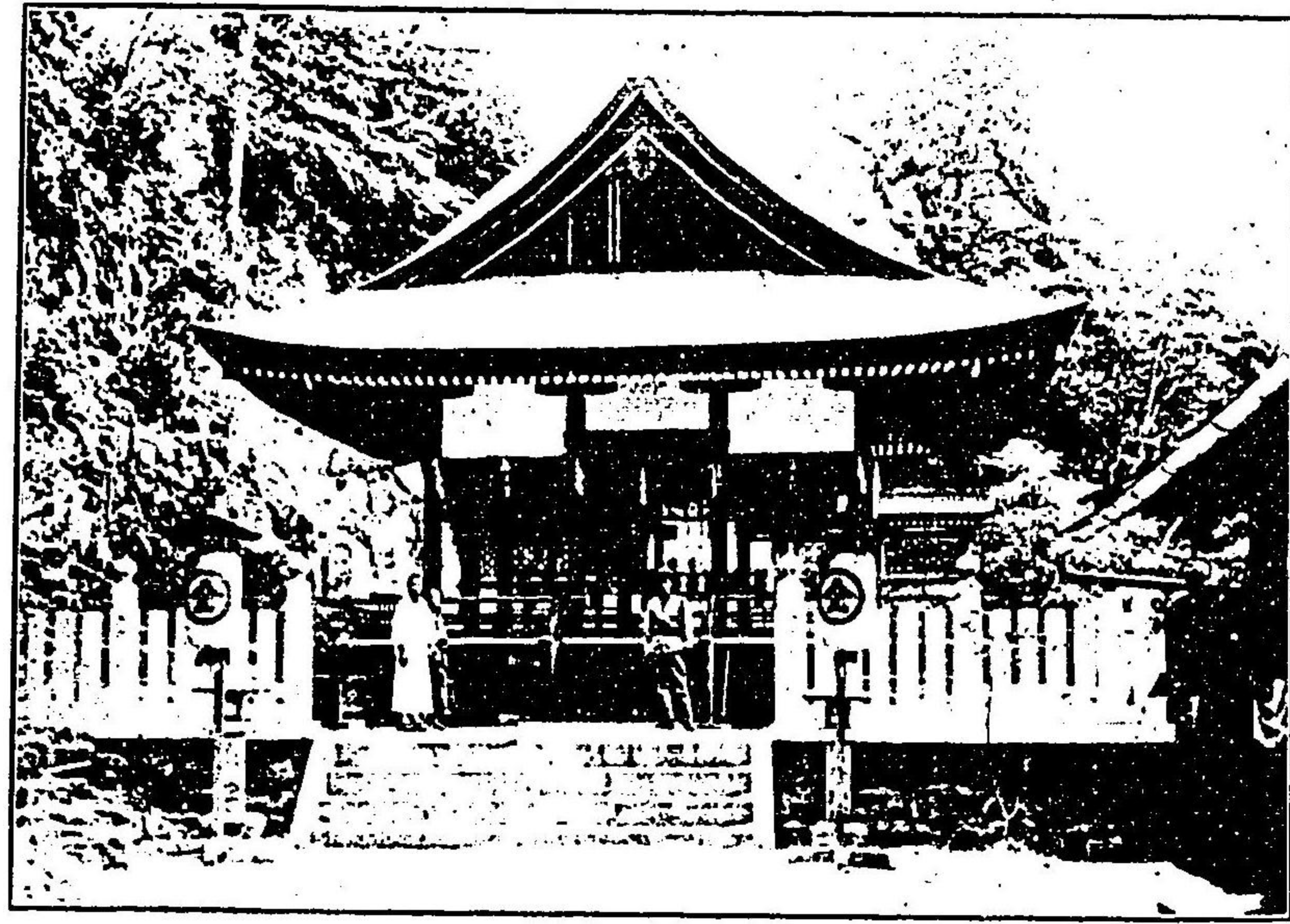
○神饌殿 あり此断崖に臨む朝夕神前に供する御饌を調ふるところなり入母屋造
檜皮葺建坪十坪餘とす神饌殿と拜殿との間に北渡殿あり其下をくゞり行けば黒門ありこれより世に奥社と稱せらるゝ末社嚴魂神社に到る參道とすこの參道開けてより
歲月を経る事多からざるを以て未だ玉垣敷石等の設なきも左右の樹木鬱蒼として深山幽谷に入るの思あり亦一仙境といふへしさて黒門を過ぎて北に行く事二町餘にして花崗石の堰堤あり是を

○眞名井貯水池 となす實に當宮防火用水道の水源なり明治三十七年の建築にし

て其構造は谿間に花崗石を以て堰堤を築き其内部及内側はセメント、コンクリート、モルター等を以て搗固め或は塗固めて水の漏洩を防ぎ二十六萬平方尺の流域より注入する水を貯へ有効貯水量八千立方尺に達し溢水路排水管などの設備を具す尙渴水の患を慮りて飲用水道より補給用水管を分岐して之に導けり今當宮水道の組織を概説せむに水道を分ちて飲用水道并防火用水道とす。

○防火用水道　は源を前記眞名井池に發し五吋鐵管によりて本宮に到り二線に分岐し一は南して齋舎前に達し此間三個所の防火栓を設く一は東へ山腹を直下屈折して社務所表書院に達し此間二個所の防火栓を設く是等水管の延長は三百二十五間にして防火栓に於ける水の昇騰力は低きもの八十尺高きもの百四十尺なり齋舎前よりは別に給水管を接続して齋舎の浴場及臺所に導き雑用水を供給す。

○飲用水道　は源を當山北隣の大麻山字杓子谷に發す同所は基線上約九百尺にして山巔に近きにも拘らず一晝夜約五百十八立方尺の水を湧出し水質は格魯兒の微量を含有するの外殆純潔なるものにして何等の設備を俟たずして能く飲料たるに適す乃水源には貯水池を設け（其構造は眞名井貯水池に均し）二吋管を敷設して末社殿、魂神社下より同社參道に到りて手水鉢に給水しそれより道路に沿ひて眞名井に到り



一枝線を出し眞名井防火用貯水池に水を補給すまで本線は防火用水管に沿ひて本宮に到り分岐し一線は本宮水舎に給水し一線は東に向ひ山腹を直下して社務所に到りて更に分岐し其一は祓戸社手水鉢に其二は神札所前手水鉢に其三は社務所臺所に各給水す線路の各處には給水栓制水瓣排氣瓣量水器等の設備あり此水源地たる大麻山字杓子谷は善通寺町及與北高篠象郷各村の共有なりしか此工事舉行を賛し山林組合會の決議を以て所要の坪數即三千坪を當宮に寄附せり本工事は凡て香川縣に委託し小野田本縣知事統督の下に赤堀技師監督となり縣吏員竹内彌二郎氏設計擔當せりさて記事前に戻り眞名井貯水池を左に見ゆきく坦道盡くる處眼界急に開け東北の山野を望むべし此附近洩疏多しよりて卯の花谷といふこれより坂路稍急にして上る事約二町末社

○嚴魂神社　に達す祭るところ嚴魂彦命なり命は今を距る事約三百年の昔當宮別當職たりし贈大僧正金剛坊宥盛大人にして兵亂四方に起り一日の苟安を得ず天下麻の如く亂れたる時に當り一身を神明に捧げて神威隆昌と國家安寧を祈り他の神社佛閣の多く兵燹に罹り或は人馬の汚塵に犯さるゝに際し神明の威稜により毅然として當宮の整備と改善に努め死して猶當山の守護たらん事を誓ひ風聲凄く陰雨暗き夕終

に行くところを知らず本宮今日の隆昌を來したるもの素より 大神の威稜による
 と雖大人の功勞亦與りて力ありといふへし茲に於て歿後威德殿と稱して其靈を祀る
 爾來年を経る事二百餘年天保某の年其功績 天聰に達し勅して大僧正を贈らしめ給
 ふ御維新後威德殿の稱を改め嚴魂神社となし境内繪馬舎附近に鎮座ありしか其地甚
 狹隘社殿亦甚小にして遺徳を彰するに足らざるを以て明治三十年地を大人の舊跡な
 る此境に卜し假殿を設け參道を開き爾來遍く江湖の協賛を得全三十八年十二月に到
 り本殿拜殿唐門及透塀の建築落成し同月十二日假殿より遷宮あり其社殿の南に向へ
 るは當宮の守護たらむとする大人の遺志に基けるものなり本殿流造檜皮葺建坪七坪
 向唐門朱塗檜皮葺透塀朱塗檜皮葺拜殿入母家造檜皮葺朱塗四方高欄建坪二十坪餘に
 して目覺むるはかりの朱の色は常磐木の翠色と相反映し甚艶美然も色彩の調和を失
 はす構造も亦他の社殿とは全く其趣を異にす當社の祭日は例月六日なり。

大神のみいつと共にかゝやかむ朝日てりそふ朱の御社

琴陵保子

春秋の花に紅葉にてりそひて朱の新宮まはゆかりけり

山下堅磐

うつし世の塵にけかれぬ内瀧の朱の宮居そ尊かりける

近藤 傳

内瀧之靈地鎮嚴魂彦尊山深曆難定樹密畫猶昏疊石雲遮路噴泉水繞垣春花與秋葉交

互飾神園

和田菊處

○威德巖 當社の西側にあり十數仞削れるか如き斷崖にして巖頭には松栢鬱蒼と
 して繁り苔滑にむしたるあり崖下は方石累々疊めるか如く人をして驚異措く能はさ
 らしむ三百年の昔嚴魂彦命參籠ありし舊跡なりさて當社の參拜を終へ再び本宮に歸
 らむ本宮直所より南に續きて

○渡殿 あり延長二十二間餘之を横きりて石階を上れば右に末社

○陸魂神社 あり、大國魂神、大國主神、少彦名神を祀る社殿王子造銅葺正保二
 年の改築なりこの左に

○神庫及神輿庫 あり神輿神寶祭器を納む神輿は全國中最壯麗なりと稱せらるゝ
 ものにして後章寶物目錄雜部に詳なり(一九五頁參照)さて渡殿の南端に

○南神饌殿 あり入母屋造檜皮葺とす其南に接して末社

○三種津姫社 あり御別宮と稱す祀るところ 三種津姫神にして即本宮の御祭神
 たる 大物主大神の後の神に當らせ給ふ祭日は例月一日とす本殿王子造檜皮葺三
 坪餘中殿檜皮葺四坪拜殿大社關棟造檜皮葺十一坪餘にして共に明治九年の建築に係
 る結構本宮に亞て優麗なり當社殿内に攝社

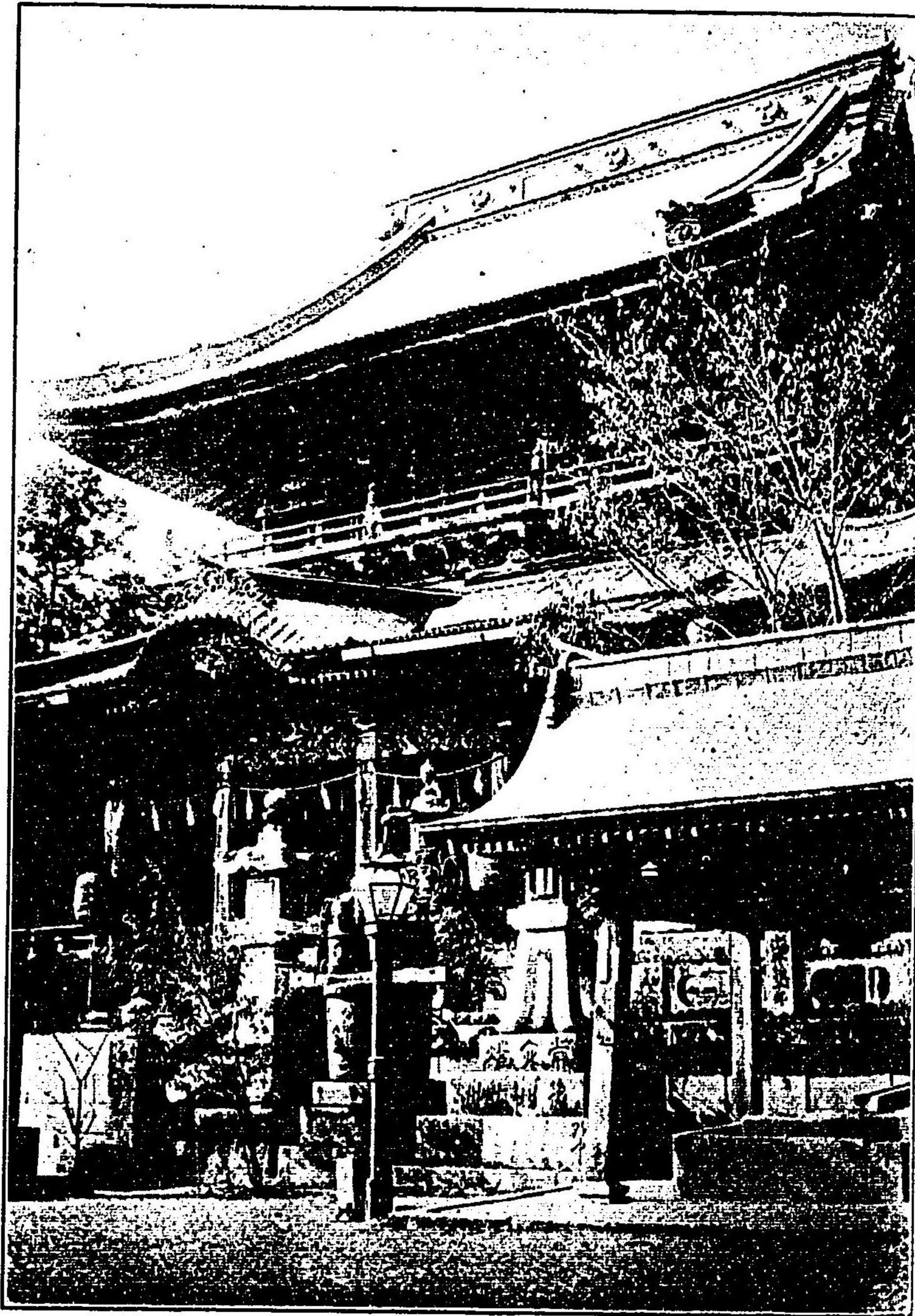
○白峰神社 あり、崇徳天皇を奉祀し其御相殿に 大山祇神、建禮門院の二柱の神を祀る元當國阿野郡松山に鎮座ありしか明治三十年當境内に御遷座あり社殿建築に至る迄假に三穗津姫社殿内に鎮め奉る祭日は例月二十六日とすさて其南に

○南直所 あり三穗津姫社詰員の宿直するところとす其西に。

○祓除殿 あり昇殿の人々祓除を修するところなり其南に南北二棟の

○繪馬舎 あり北のものは入母屋造瓦葺石疊床にして建坪三十四坪天明九年の改築なり南のものは入母家造瓦葺土間床建坪三十一坪餘なり信者より祈願報賽の爲献納したる無數の繪馬を掲げさすかに廣き舎内も猶狹隘を告ぐ就中珍しきは軍艦よりの流し初穂と稱ふるものにして明治二十七八年役また近くは三十七八年役或は平時と雖軍艦の讚岐沖を進航するに當り艦内西乗組員初穂を献せむか爲醜金して之を水の透入せさる厚き布に納め各員の姓名を記したる板に繋ぎ海中に投するときには讚岐沿岸に漂着し村役場等の手を経て當宮に納入せらる其板札は舎内に陳列しあれば就て見るへし北繪馬舎の西側には大日本帝國水難救濟會救難具の陳列ありさて其南に接して

○齋舎 あり神職の齋戒沐浴するところにして建坪二十八坪なりまた南繪馬舎の



社旭社末宮羅比刀金

西に末社二棟あり一は

○常磐神社 にして、武雷尊、譽多和氣尊を祀る一は

○菅原神社 にして、菅原道真臣命を祀るさて北繪馬舎の東北に銅馬あり製作優麗よく其體を得たりその北に接して末社

○嚴島神社 あり、伊都岐島姫尊を祀る此社もと境外にありしか明治三十一年迎へ奉る社殿入母家造檜皮葺とす次に三穗津姫社前より下向道に向はむに左側に

○御炊舎 あり神饌を調理するところなり流造瓦葺十坪餘敢て華麗ならざるも結構温雅なるを覺ゆさて下向道を下れば中段に末社

○大山祇神社 あり、大山祇神を祀る流造檜皮葺とす次に下ること數十階豪壯華麗なる大社ありこれを末社

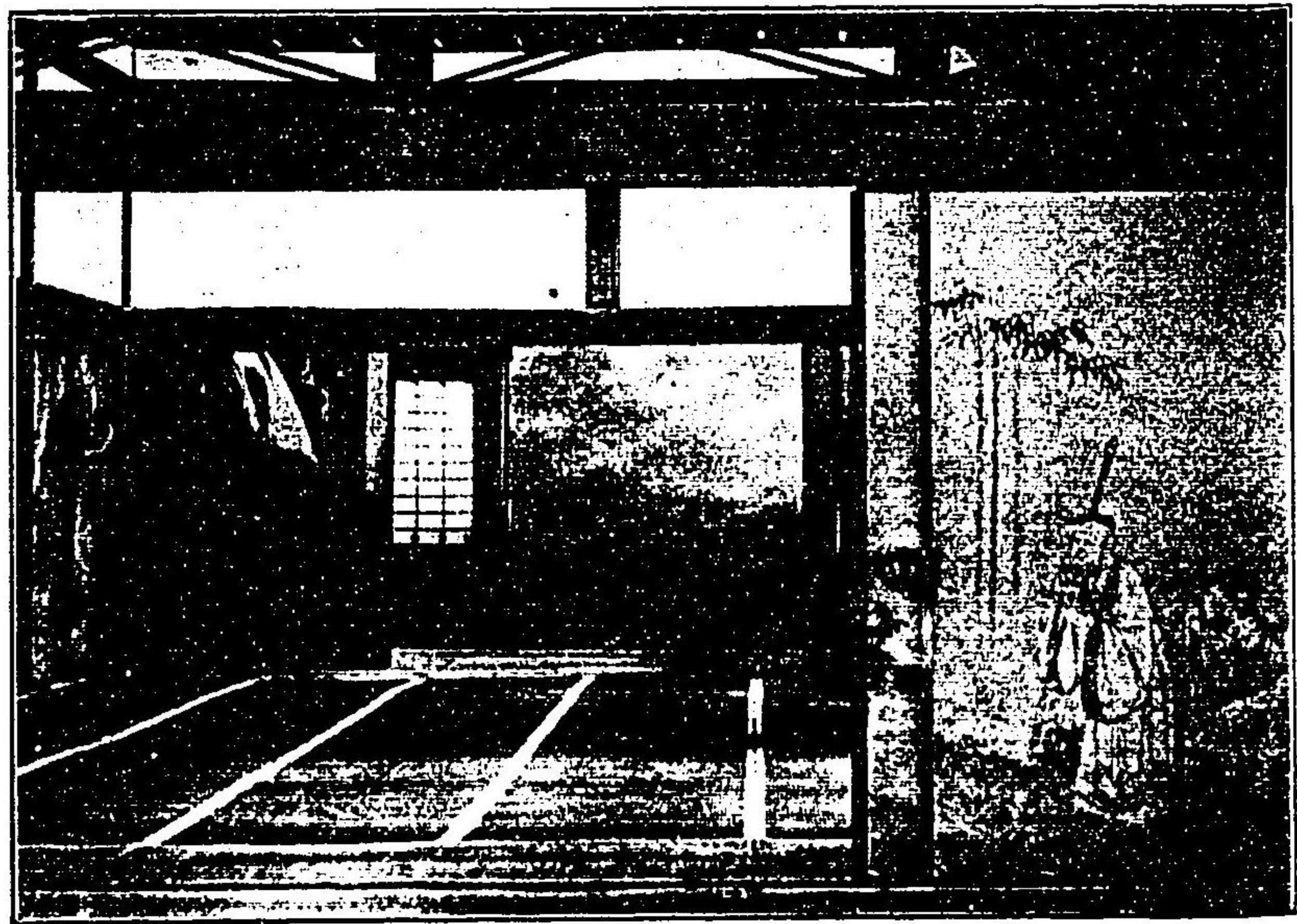
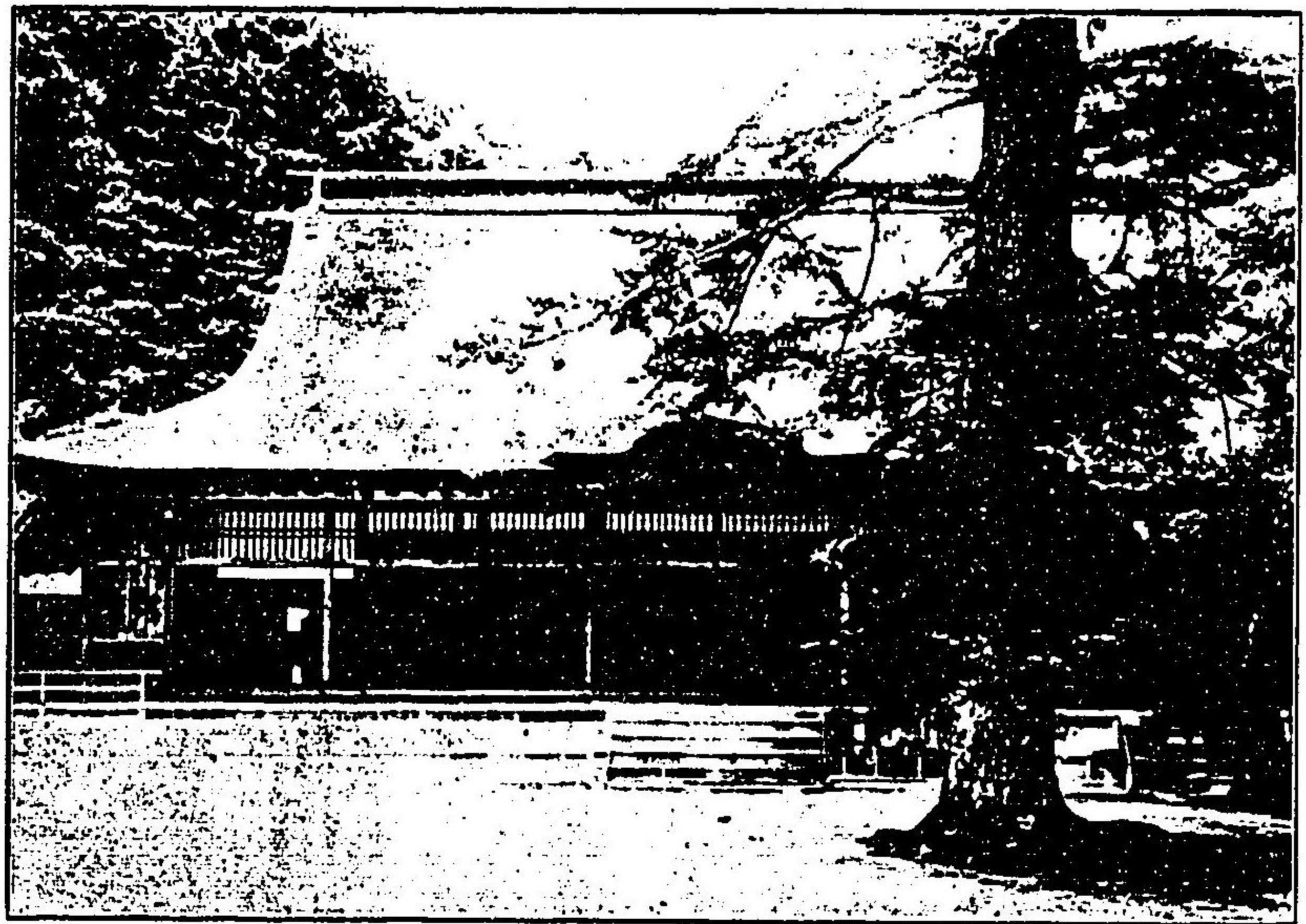
○旭社 とす、天御中主神、高皇產靈神、神皇產靈神、伊邪那岐神、伊邪那美神、天照大御神、天津神國津神、八百萬神を祀る祭日は例月一日とす社殿二重入母家造銅瓦葺高六丈一尺桁行梁行各六丈餘總坪數百一坪全部椶材を用ゐる上層屋根裏には總て卷雲を彫み柱間扉等には諸種の人物鳥獸花卉を彫刻し其華麗なる宇内稀に見るところにして實に當代に於ける藝術の精華を蒐めたるものといふへし創立は天保八年な

り旭社二字の扁額は正二位綾小路有長筆にして樓上に掲揚せる降神觀三字の額は清國翰林院侍讀探花及第王文治筆同國人劉雲臺の寄附なりさて始の參拜路を戻りて社務所に到らむか銅葺の宏壯なる門をくゞり正面に

○玄關 あり檜皮葺千鳥破風出は唐破風にして床張付は金地に扁栢鷲圖黒畫なり森寛齋の筆とす玄關の東に接して

○神札所 あり神札の授與は此所にて請ふへしこゝに掲揚せる扁額は南谷の筆跡なり神札所の東に

○保存會事務所 あり保存會は當宮の社殿をはしめ諸種の建築物及境内風致を永遠に保存すると共に益壯麗ならしめむか爲往年創立せられたるものにして諸國の信徒大に此舉を賛し續々金員を寄附す此事畏くも 天皇陛下の敍聞に達し特に御思召を以て金三百圓を賜ふまた内務省よりも金五百圓を下賜せらる凡て信徒にして當宮に金員を寄附したるものにはその金額に應し金銀木盃その外諸種の品物を贈られまた寄附者の氏名と其金額は或は石に或は木に彫刻或は記入して表彰せらるゝ例なり詳細の手續に就ては此事務所又は神札所に於て聞くへしさて社務所内を説明せむに玄關を入りて程なく



○表書院 　に達す書院は入母家造檜皮葺建坪百十二坪萬治二年の建築なり其東端なる一室を

○鶴之間 　と稱す襖及床張付には墨畫鶴圖を畫く圓山應舉の筆にして床張付眠鶴圖殊に名あり共に甲種四等國寶なり次に

○虎之間 　に到る襖に墨畫遊虎圖を畫く就中溪水を呑むものは古來水呑の虎と稱して喧傳せらる前項と同じく應舉の筆にして國寶なり次に

○七賢之間 　に到る襖に竹林七賢を畫くこれまた應舉の筆にして國寶なり次に

○二之間 　に到る襖及長押下張付に墨畫山水樓閣圖を畫く應舉の筆にして甲種三等國寶なり次に

○表上段 　に到る上段床張付は墨畫瀑布の圖にして丹波保津川上流の景なるか如し一條の瀑布高く懸り落ちて深淵となり流れ出るところ激流奔騰岩を噛み崖上僅に根を定めたる双松は永久の水煙に浴する狀眞に水聲松籟あるか如しこれまた應舉の筆にして恐らくは其最優秀なるものならん甲種三等國寶なり按ふに應舉の筆世に少からず然とも斯くの如き大作にして優秀なるもの果して何の處にかある天下無比といふもの豈徒らに誇大ならむや先年 　東宮殿下行啓の砌此室を以て御休憩の御間

にあてまゐらせたりさて虎之間鶴之間の北隣に

○富士之間 あり一之間二之間の二室とす一之間床張付には墨畫を以て雲煙漂渺たる間に富嶽の雪を戴けるを畫き襖には其裾野を畫く二之間襖には濃彩を用ゐて建久四年源頼朝富士野に狩するの狀を畫く風俗調度よく律に適ひ數百年の往時を追想するに足る一之間と共に村田丹陵の筆にして其無價揮毫するところなりさて表書院の西に

○林泉 あり幽邃閑雅にして小雨そは降る朝鯉魚の時に潑刺たるか如き詩情掬すへきあり。

沈々碧水印清虚裡許時々躍錦魚爲隊爲群遊日月不知腹内可藏書 清國人雷音博

同隊泳其樂自無香餌投繞巖縱所往活潑圍洋攸 弘文院學士林春齋

鑿沼在清幽濠梁自知樂更多芳餌投於物幾鱗躍 皆川淇園

象嶺巖前貯碧流圓波動處戲魚浮從容相逐自知樂深趣正思蒙叟遊 前相國寺芳渚

清池開一鑑影倒弄波人拍檻投芳餌喁々出錦鱗 伊藤東涯

仁積是爲靈靈沼今在此已無網罟患只飽芳餌美 藤澤南岳

圍々又洋々池心得其所迎人不復驚游躍交相聚 和紀醉石

さて此池を左に見て長廊三四折すれば

○奥書院 に達す書院入母家造瓦葺建坪五十二坪餘萬治二年の建築なり南端の室を

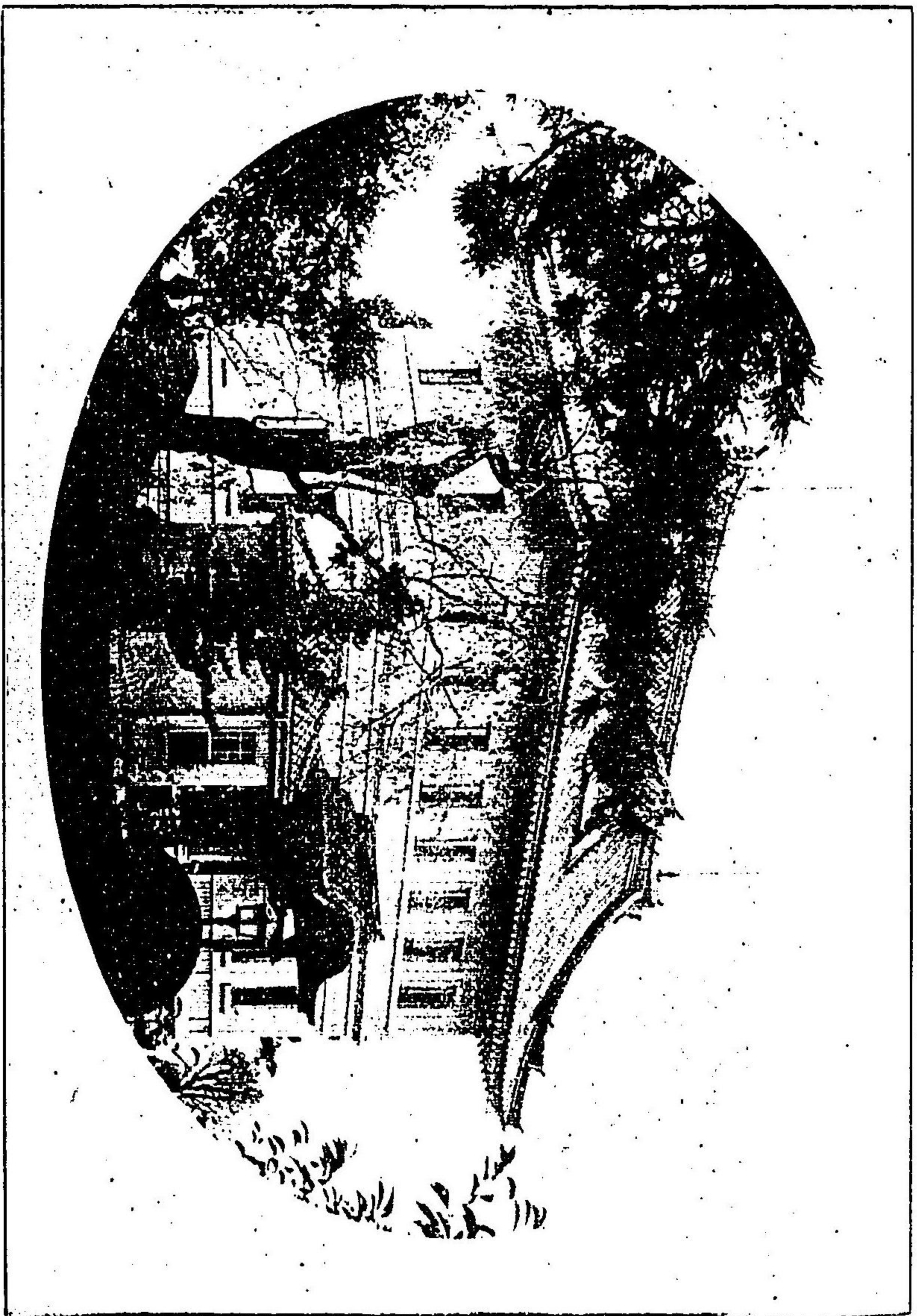
○柳之間 と稱す襖及長押上下に金地濃彩柳鶯之圖を畫く岸岱の筆なり次に

○菖蒲之間 に到る襖及長押上共に金地濃彩にして襖には菖蒲水禽之圖を畫き長押上には群蝶之圖を畫く共に岸岱の筆なり群蝶は數十種の蝶類を懇切に寫生せるものなれば管に美術上よりのみならず動物學上よりもまた好參考品たらん次に

○春之間 に到る一に二之間と稱すこれまた金地濃彩春の山野を畫く岸岱の筆なり以上柳菖蒲及春野圖は岸岱畢世の大作にして色彩優麗なるも婉柔に失せず構圖豪宕なるも細心の蹟あり岸岱を評するものは先此圖を見ざる可らず臨時全國寶物取調局より美術上の參考品として鑑査狀を交付せられたるは誠に故ありといふへし(一三二頁参照) 春之間と菖蒲之間との境なる長押上の欄間は扇を組合せたる圖の木地透彫にして布置構圖まさに圖按家の範たらんか春之間の次に

○奥上段 あり一に花之間と稱す床張付及襖は凡て各種各様の花卉を畫き構圖敢て奇ならざるも艶麗愛すべく圖様卑俗なるへくして卑俗ならざるところ即巨匠の手

腕を見るへし花鳥畫の大家として名高き伊藤若冲の筆なり此室は皇族御參拜の節常に其御座所にあてられたるどころなりさて奥書院よりの眺望甚絶佳にして本宮より見るものとまた別種の趣あり此附近になほ白書院寶庫をはじめ十數棟の建物あるも省略に附し章を改めて寶物館及青葉岡を説かむとす。



全刀比羅宮寶物館



第四章 寶物館及青葉岡

第一節 寶物館

○沿革 寶物館及青葉岡は第三章境内の部に記載すべき筈なるも共に落成日猶淺く爲に質議を試むる人多きと本誌に寶物目録を記載せる緣由により特に一章を設くることとせりさて當宮の寶物類は約九百餘點の多きに上り美術上の模範として國寶に列せられたるもの或は藝術の参考品として臨時全國寶物取調局より鑑査狀若くは登録狀を交付せられたるものも亦少からず其他學藝に工藝に資料として尊重すべき

もの百を以て算ふ是等は凡て從來社務所内の寶庫に收藏したるも其位置樹木蒼鬱たる山上にあるを以て濕氣を防ぐ事能はざるのみならず名匠大家の熱誠を込めたる作品をして空しく庫底に在らしむるは寶物其物に對して遺憾なるに止まらず藝術に對しても亦其道を得たりといふ可からず時に書院に陳列して公衆の觀覽に供したることありと雖然もうらむらくは其室内明快を缺き保護の設備亦遺憾なき能はず茲に於て香川縣知事小野田元熙氏の幹旋に基き資を當宮豫備金に求めて本館建築の計畫を定め工事に關しては知事統轄の下に之を香川縣に囑托し明治三十六年八月三日工を起す乃ち地を境内櫻馬場の北方小丘の上風光絶佳の境に卜したり此地四戸の社屬邸宅ありしか腐朽甚しく管に永存の見込なきのみならず風致上亦宜しからざるを以て全部取崩して地を平にし道を開き其中央に建築することに定め起工より月を閲すること二十三個月三十八年七月十六日を以て竣工す。

○構造 本館は和洋折中の構造にして南面石造の建物なり、桁行十間、梁行五間、高さ地盤より軒桁上面まで三十六尺、各石材は本縣青木産の花崗石を用ゐ、腰積は江戸切、柱は切出にして長押付、階下窓下の外部は金剛形の化粧積、階上窓外の上面には唐模様の彫刻あり、東方妻の階下に非常口を設く、屋根は兩入母家造正面千

鳥破風にして本葺なり、瓦巴の文様は櫻花、軒出六尺五寸にして一軒造、垂木は荒物造、兩妻及千鳥軒裏共白土の磨塗、立間は唐破風造、同屋根は銅板葺、同天井は格天井樺造、同彫刻は鎌倉式、昇降口は石階なり、階下内部の床は人造石四半敷、階上床は檜板張、天井は蛇腹附漆喰塗、階上及階下の窓は外部に玻璃障子二枚開を設け内部には階下の分木製化粧戸四枚折階上の分鐵扉四枚折を仕付く、階下窓の上部には玻璃簾入の欄間を設置せり、階段は楓造手摺操物、壁除の腰板木賊張、凡て木部はヴァニス塗、階上階下共包壁塗なり、又館の周圍には石柱鐵鎖付の柵を廻せり、棟上には避雷針を設備す、さて本館の設計者は文部技師久留正道本縣技師石原錠太郎の二氏にして縣技師赤堀徳治郎氏工事監督長となり主幹には石原技師助手には縣吏員吉田久太郎氏之に當る抑如上本館の様式は和洋折中にして當初建築に際し神社境内たるの故を以て務めて日本固有の様式に依らむとせしも防濕の必要は四壁を厚からしめ防火の必要は不可燃質の材料を用ゐしめ光線射入の必要は窓に玻璃を用ゐしめ斯くして遂に洋風を加味するの止を得ざるに到りたりと雖和洋折中式の常に陥り易き各部の不調和を巧に避け得たるのみならず神社境内として他の建物に對し著しき破調を免れしめたるは設計者苦心の存するところなるへし本館は規模敢て

大ならざるも其構造は他に類例を見ざるところにして此種建造物の参考資料たらしむ
 經にし千代來む萬代を照すらむ玉の寶の數をつらねて 山地陽三
 神寶藏めまつれるほくらにも高きみいつの仰かるゝ哉 大口鯛二
 み寶と共にくちせて千代や經む青葉か岡の神の石くら 琴陵保子
 おのつから神のみいつの尊さは御寶庫に見えわたる哉 近藤 傳
 ○寶物 當宮の寶物は數百の多きを算し悉く本館に陳列し難きを以て時々陳列替
 を爲す豫定にして其品名の如きは第七章寶物目錄に記載せるを以て茲に贅せず。

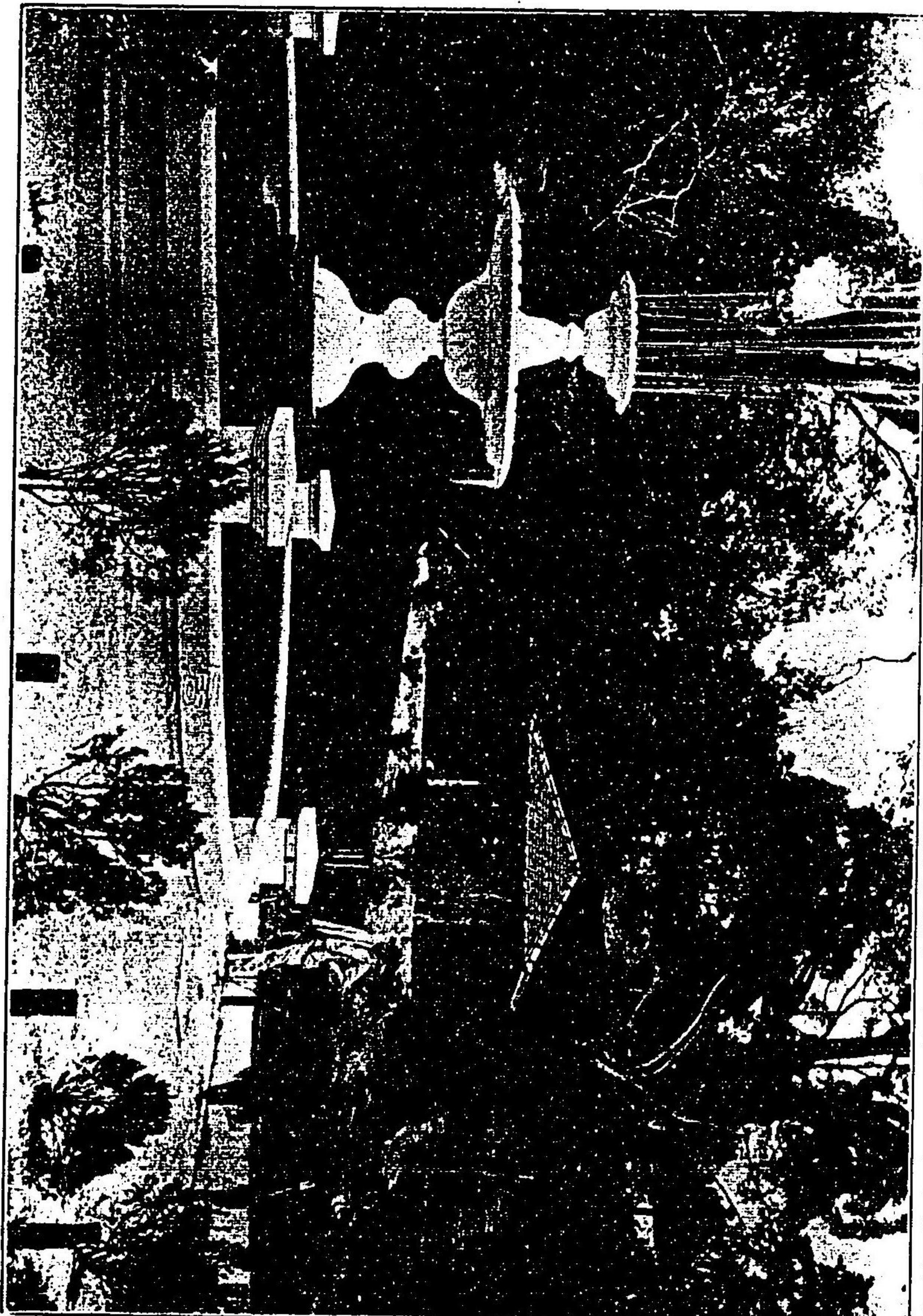
第二節 青葉岡

○風光 青葉岡は寶物館周圍及東西二庭園即櫻馬場北側の阜陵を總稱せるもの
 にして南は琴平山の山嘴たる祖谷愛宕の諸峰蜿蜒たるを望むへく尾上の松の蕭洒なる
 谷間の杉の豪宕なる真に一幅の土佐畫を展へたるか如し就中愛宕山の夕陽は殊に名
 あり。

あすも亦ひより成らし愛宕山高ねさやかに夕日さす也 子爵黒田清綱

樹陰石壇雲遠廊一溪暝色欲昏黃賽祠人去歸鴉亂嶺上老樹空夕陽 日下部鳴鶴

西は琴平山の松柏永久に緑にして老杉の木の間には端嚴なる御薨の見ゆるあり東北



金刀比羅宮青葉岡

の二方は水田遠く開けて無數の人家其間に點在するを見るへく更に目を放ては蒼海を隔て、備前の連峰起伏するを望むへし若しそれ春陽蒨蕩の候節を此地に曳かは羽化登仙の思ありと云ふもの敢て過賞にあらざるへし。

○樹木 本園には各種の樹木を植栽せり即常緑樹あり落葉樹あり林木に庭樹に特用類に觀賞類に苟くも世人に裨益あるものは努めて之を蒐集し學藝上の資料たるへき寶物館に對し庭園は以て植物上智識の啓發に資せんことを期したれば每樹に和漢名學名の題標を建てたり現今植栽せらるゝもの左の如し。

松	楨	鐵	石	梧	菜	漆	五	葶
栢	柳	樹	南	桐	黃	樹	加	麻
科	科	科	科	科	科	科	科	科
六十五種	一	一	七	一	二十三種	三	三	五
種	種	種	種	種	種	種	種	種
蓋	伏	瑞	衛	大	秦	枸		
薇	牛	香	矛	戟	椒	骨		
科	科	科	科	科	科	科		
二十八種	二	二	二	六	一	六		
種	種	種	種	種	種	種		

金	馬	虎	樟	荳	忍	錦	石	蠟	禾	冬	鼠	橙	櫻	胡
縷	鞭	耳			冬	葵	蒜	梅	本	青	李	橘	櫚	桃
梅	草	草	科	科	科	科	科	科	科	科	科	科	科	科
一	一	四	四	六	一	一	一	一	一	二	一	二	一	四
種	種	種	種	種	種	種	種	種	種	種	種	種	種	種
千	無	山	茶	棟	菊	芭	百	石	鳶	柿	木	茜	械	澁
屈	患	菜				蕉	合	榴	尾	樹	蘭	草	樹	疏
菜	樹	莢	科	科	科	科	科	科	科	科	科	科	科	科
二	二	三	十	一	二	一	四	二	四	二	四	二	九	三
種	種	種	種	種	種	種	種	種	種	種	種	種	種	種

五四

金	齊	雜
絲	墩	
桃	果	類
科	科	類
二	二	四十七
種	種	種
		二百九十三
		種
紫	夾	
金	竹	
牛	桃	
科	科	
一	二	
種	種	

右は三十九年四月の調査に係る爾來新植せらるゝあり枯損するあり常に多少の異動あるは免れざるところなり。

○設備 本庭園は單に植物上の資料を供するに止らす遠來の賽客をして其旅情を慰せしむるにあるを以て樹間には四阿を建て噴水を設け胡牀を備へ四邊の風光と相俟て優遊自ら歸を忘れしむるものあり噴水々盤の様式は粧飾の華麗を避け寶物館の形式と能く調和して端然たり四阿二棟形狀を異にし各其處を得たるは見るへき點ならむか。

見なれてもめつらしき哉そに鳥の青葉か岡の花の明暮
 名におへる青葉か岡の深緑ふかくも仰け神のみいつを
 しけりあふ岡の青葉の枝ごとに神の惠の露も置くらむ
 月雪の眺のみかは岡の名の青葉も花もめてたかりけり

山下堅磐
 堀家嘉造
 吉田好信
 黒木勝一

五五

第五章 雜記



○職制 當宮職員は宮司禰宜各一人主典四人其他の社員は百數十人にして事務を宮司室第一課第二課第三課第四課の一室四課に分ちさらに之を祭務神殿神樂神札庶務寶物山林水道出納用度營繕の十一係に分ち各擔當の事務に鞅掌す外に崇敬講社本部ありこれまた庶務會計の二係に分る。

○境外末社 他府縣にある當宮境外末社左の如し。

東京市深川區古石場町鎮座 金刀比羅神社

大坂市南區難波河原町鎮座 金刀比羅神社
 神戸市福原町鎮座 金刀比羅神社
 尾張國丹羽郡瀬部村鎮座 金刀比羅神社
 出雲國直江鎮座 金刀比羅神社

○貴神の參拜 賽客數百萬貴神少からざるを以て一々列記するを得ずといへとも
 皇族の親しく御參拜あらせられしは左の如し。

皇太子殿下 明治三十六年十月十三日
 山階宮晃親王殿下 明治二十二年六月三日
 有栖川宮熾仁親王殿下 明治二十年十二月八日
 有栖川宮威仁親王殿下 明治十七年七月六日
 有栖川宮裁仁王殿下 明治三十八年十一月二十二日
 小松宮彰仁親王殿下 明治三十三年六月二十二日
 伏見宮貞愛親王殿下 明治二十三年一月三十一日
 伏見宮文秀女王殿下 明治三十四年四月二十九日
 華頂宮愛賢王殿下 明治三十年七月二十八日

梨本宮守正王殿下

明治二十三年五月二十五日

同宮

明治二十九年十月十八日

奥地利ハンリー親王殿下

明治二十二年八月二日

○建物統計 境内建物類別統計左の如し(坪數は建坪を示す)

社	殿	殿	殿	殿	所	舍	舍	舍	舍	舍	廊	廊	水	館
神	神	神	神	神	御	直	齋	忌	繪	回	手	寶	物	物
儀	樂	樂	樂	樂	炊	所	所	籠	馬	水	水	物	物	物
三	一	一	一	一	三	一	一	一	二	四	二	一	二	一
棟	棟	棟	棟	棟	棟	棟	棟	棟	棟	棟	棟	棟	棟	棟
二十坪餘	十坪餘	十坪餘	十坪餘	十坪餘	九坪餘	二十九坪餘	十二坪餘	六十五坪餘	五十九坪餘	五十坪餘	五十坪餘	五十坪餘	五十坪餘	五十坪餘
二百二十七坪餘														

巡查派出所	一棟	十坪餘
鼓樓	一棟	六坪餘
書院及事務室等	十七棟	八百四十坪餘
休息所	三棟	十四坪餘
木馬舍	一棟	十八坪餘
馬廐	一棟	十四坪餘
番舍	五棟	二十六坪餘
土藏物置	十二棟	二百三十坪餘
棟門	九棟	六十四坪餘
計	九十三棟	千七百八十七坪餘

○水道統計 當宮所有水道鐵管の統計左の如し。
 飲用水道 本支線計延長 八百四十間
 防火水道 本支線計延長 三百二十五間
 計 千百六十五間

○鳥居統計 境内及接續地に於ける鳥居統計左の如し。

石製鳥居	九基
鐵製鳥居	一基
唐銅製鳥居	一基
計	十一基

○石階敷石玉垣統計 境内に於ける石階敷石及石玉垣の統計左の如し。
 石階階敷 六百二十八段
 石玉垣延長 六百四十九間四尺餘
 敷石延長 四百六十三間四尺餘

○立燈籠統計 境内に於ける立燈籠統計左の如し。
 銅製燈籠 四十八基
 陶製燈籠 五基
 石造燈籠 三百八十五基
 計 四百三十八基

○高麗狗統計 境内及接續地に於ける高麗狗統計左の如し。
 銅製高麗狗 二對

陶製高麗狗 一 對
石造高麗狗 四 對
計 七 對

○水槽石碑統計 境内及接續地に於ける置据水槽及石碑の統計左の如し。

銅製水槽 四 個
鐵製水槽 十二個
計 十六個
石碑 十 基

○社設電話統計 當宮所有電話に關る統計左の如し。

本宮、社務所間 電線延長三百十三間 電柱八本
社務所、崇敬講社本部間 電線延長百六十間 電柱五本
社務所、宮司宅間 線路四百五十四間四尺 電線延長九百〇九間二尺 電柱十九本

合計 線路六百九十一間一尺 電線延長千三百八十二間二尺 電柱三十二本

○琴平山面積及其區分

全面積百九十一町六反二十六步 内譯左の如し
當宮境内 百〇一町二反一畝七步
當宮所有林 八十二町二反十五步
琴平公園 八町一反九畝七步

第六章 境 外



○琴平町 琴平町は當山東麓の市街にして即香川縣仲多度郡にあり明治三十九年四月に於て戸數千三百九十四戸人口六千七百七十二人（男三千三百三十五人、女三千四百三十七人）とす潮川は市街の中部を南北に貫流し一之橋、鞘橋、榮橋、小松橋等之に架す北端に官線鐵道琴平驛あり善通寺多度津丸龜坂出等を経て高松に通し一日十數回發車するを以て交通至便なり。

汽車神速若奔流來往隣々鐵路頭響似迅雷煙似墨象山香客見多稠 臼杵陶庵

市街頗般盛にして旅客の來往織るか如く諸種の商賈軒を並へ日常の事概便せざるな
し夜は電燈の光燦として猶之層の光景を添ふ市の西部は琴平山の山麓より順次山腹
に上りて金刀比羅宮の大門に達す往昔人家今日の如く多からざる時に當りても五百
長市と稱し詩に歌に其般賑を唱せらる。

半千長市塵高下巧成隣無意弄烟景沾諸待價人

林 春常

廊居五百氣雄哉陣々風生街裏埃匪雷市聲慶午枕行商絡繹去還回

前真如堂良按

昔閭號五百今市已盈千比屋塵緣阪填街人摩肩

皆川淇園

紅欄兼碧檻相列半千家來往人如織終年見物華

和紀醉石

半千閭且千櫛比奢華競神恩日々崇市肆年々盛

藤澤南岳

夏の夕涼風徐に水面を涉り行人の衣袂翻るときは盛夏猶冷を覺ゆるものあり。

前市の夜のすゝみの床しめて夏をも秋にかへてける哉 文學博士黒川真頼

水精燈映繡樓臺衣上汗沾街上埃人客各揮金字扇買西瓜去買氷來 森 春濤

燈火樓臺籬有波黄昏穠動酒邊譚涼生白紵清於雪滿地月明人影多 永坂石塚

○官衙公署 市内及隣接地に於ける官衙公署の重なるは町役場、警察分署、尋常
高等兩小學校、郵便電信局、琴平小林區署、琴平工業學校、丸龜區裁判所琴平出張

所等なり。

○琴平公園 公園は市街の南端丘陵上にあり琴平山字金山寺山の一區を劃す老松
參差たるあたり櫻槭枝を交え四阿其間に點在し仰きては琴平山の青巒を望み俯して
は潮川の清流を瞰ふへし風光四時佳ならざるなしと雖春秋殊に宜し廣褒八町一反九
畝七歩なりとす。

松青巖紫路螺旋躑躅滿山布錦氈文墨客來多諷詠百禽相和語春烟 田岡梅里

○金刀比羅宮神事場 一に御旅所或は南神苑と稱す市街の南端にありて潮川の清
流に臨む砂白くして世塵を止めず幾百年を経たる老松枝を垂れて潺々たる碧流に影
を宿し松籟颯々として不斷の樂を奏す月明に星稀なる夕は言はずもかな雪の曙雨の
朝轉詩情を動すに足る四月十五日田植神事、六月三十日大祓神事、九月八日潮川神
事并に十月十日十一日大祭は此齋庭に於て行はる古來楓時修禊と稱して古人の詩歌
に乏しからず。

明妙照妙なせる紅葉よみそきの幣と散らすもあらなむ 鈴木重嶺

琴祠秋隱翠微中下有清流上有楓靈鼓坎坎醉人散神鴉啼送夕陽紅 森 槐南

萬野曲流清見底石潭秋水淨無蘆林間温酒燒紅葉到處相逢禊領人 森 春濤

潮川の齋庭に沿へるあたりを石淵と稱す石淵新浴と題する古人の詩歌亦多し。

神代より例をひきて潮ならぬ川上遠くみそきしつらん 犬塚興恕

緑水盤旋不測淵青山掩映九重天祭時新浴秋風爽莫使神龍驚晏眠 僧 宗達

石淵風浴新知有詠歸人能使箇心潔臨流欲賽神 林 春常

淵秋修禊浴趣同洛水春何須蘭芷澤自有引潮新 皆川淇園

城外梅林あり花蕾綻はむときは春風爲に芳し此處も亦一樂園たるを失はず園の一隅に潮川神事場碑あり牧野古愚の撰文にして市河米庵の書なり。

潮川神事場碑高松儒員牧野古愚謹撰 加藩市河三亥書并題額

象頭山東南之麓臨萬農之水水自東奔注觸崖石而北流旁廣中深名曰石淵其側喬松蒼鬱陰地呼爲潮川神事場神尸行祓禊離垢之儀于此是爲 金毘羅大權現大祭之首務

謹按年例以十月十日舉大祭自上古既然至 後嵯峨帝寬元元年 特勅脩其儀 詔

書今尙存焉神尸上下二偶預卜小松莊良家童男女以任之俗謂之頭人新造廬舍以奉之

選順良翁嫗爲之傅保至祭之日具儀衛以登山其盛如王者凡百費用皆國守給之頭人以

下例齋戒三旬故以九月八日浴水致潔金光院主泄而禳之其儀甚嚴所謂神事是也相傳

初行之多度津之海汀正平年間國內兵爭道路多梗乃權遣人取海潮雜之淵水以存典刑



石淵神事場碑

後習爲常以至于今是其所以有潮川之稱也但塲舊無墻垣之制牛馬牧焉兒童嬉焉終歲蕪穢臨時一掃除之耳向者鄉之吏下川豐矩竊歎之欲常淨潔之未得其方而卒同僚川崎重固能繼其志以今年春與一二父老謀乃爲修治永續之計遂募國中之善信一言纔唱千金忽聚於是大興工役疊石繞欄正其區域數旬而竣功景象一新使人肅然起敬無敢近狎者嗚呼此舉雖因 神德之感召而人力亦不細矣宜勒之石以示久遠而以予之生貫其鄉來徵拙文義不可辭因併記神事之源委使後世有所考若其募緣幹事人名則列之于碑陰云 弘化三年歲次丙午六月中浣建

大神のみゆきむかへて照妙のぬさともにはふ山の紅葉
年毎の神の御幸をまつか枝のさかえ久しき所なりけり

片岡 惜範
琴陵 保子

○金刀比羅宮鞘橋 鞘橋は一に浮橋といふ神事塲の北端潮川に架せる奇橋にして銅葺唐破風の屋根ありて瀟洒なる彫刻を施せりこれ鞘橋の名ある所以にしてまた橋下柱を用ゐず兩岸より組出の構造なるを以て一に浮橋の名あり長十三間幅二間半創立年代詳ならずと雖元録丁丑既に熊谷立閑の詩あるを見る其後寛永天明年度の改造を経て現今のものは明治二年の改築にして阿波國鞘橋講中の寄附せるものなり元市街内町新町間即一之橋の位置にありしか去る三十八年今の位置に轉架し并せて修繕

を加へたり毎年大祭に當り神輿此橋上を渡御あり。

これやこの天の浮橋うへしこそ我大神の渡りましぬれ

久米幹文

欄にいたちよらん旅衣雨にぬらさぬはしもこそあれ

犬塚興恕

板橋高架界東西一帶長流北拱落日落廊中雲霧合錯覺斯身度天梯

熊谷立閑

長虹彎挂風雲際人水相分兩道行象外咸觀舊日月臨流洗耳有誰廢

清國人雷音博

人攀西嶽去水向北溟流風力推無運始知不是舟

林 春常

廊腰縵遠淨無塵複道行空疑到秦八福能功得其一普蒙濟度往來人

僧 永集

橋上安廊屋設廂巨兩根在中何所似舟居非水人

皆川淇園

複道長三丈穹窿架溪岸遠人可慰勞勿佐秦宮看

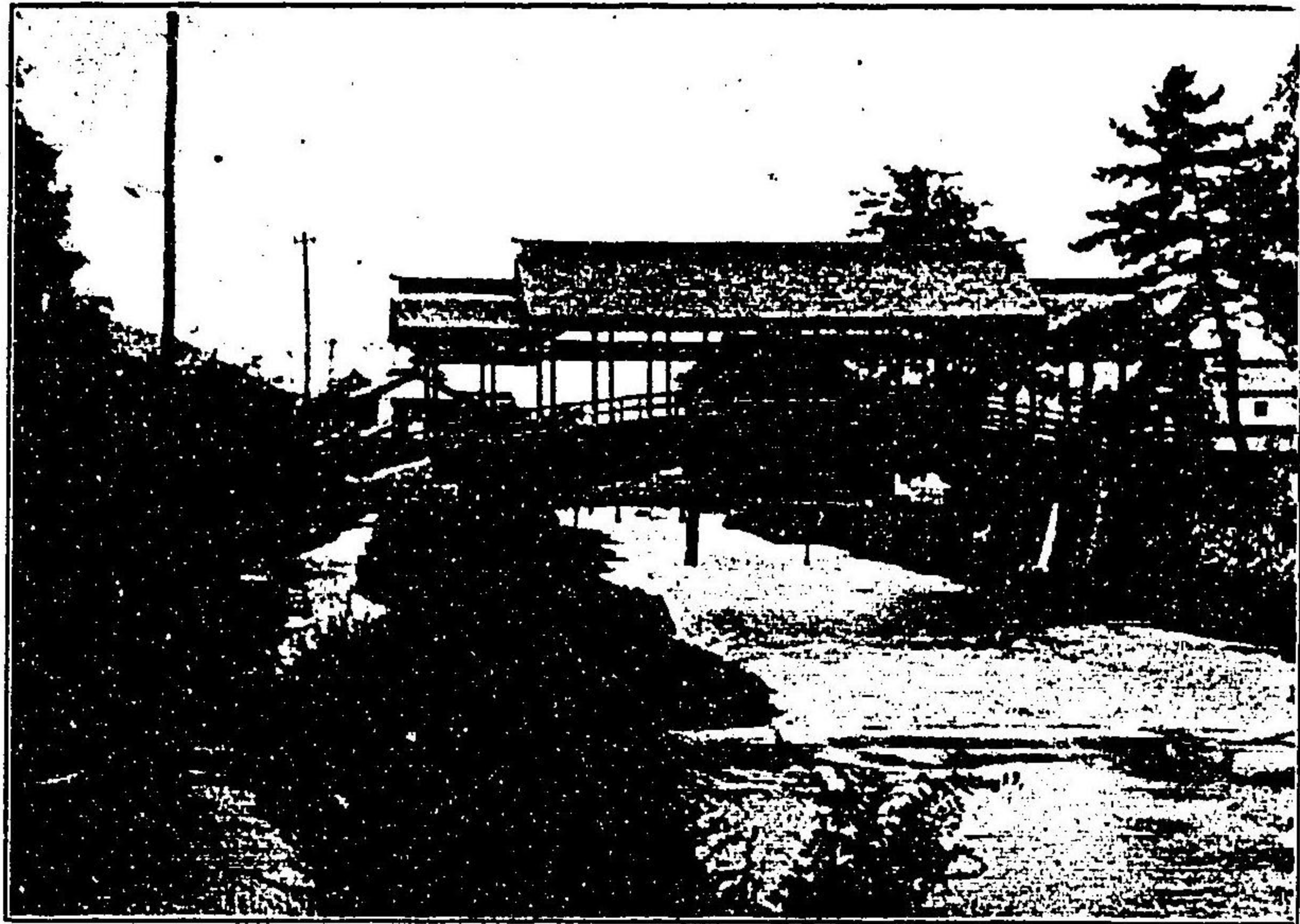
藤澤南岳

長橋有廊屋常避雨兼風去來多少客何必擬秦宮

和紀醉石

○金刀比羅宮高燈籠 市街の東部富士見町を北すれば左右に石造の献燈數十基羅列し其間數十の櫻樹を植栽せるを見るさて更に進めは路の東側に靈驗碑あり朝川鼎の撰文にして江戸増上寺僧顯察の書なり文に云、

讚岐象頭山金毘羅大權現靈驗甚著四方之人無不奔走歸依進香火者今諸國多 金毘羅祠而皆非垂跡之真也故象頭山獨稱日本一社而尸祝尊崇爲最盛余友神原巨嘗仕某



侯頗見信任惟是爨所自起萋斐者實爲厲階壬午正月緣事罹重譴禍將不測乃計脫潛往京師尋將歸江戶而白其冤路經矢橋有同渡者云是讚岐人道及 金毘羅大權現利益廣大尤極靈應亘素奉之虔亟蒙默佑因謂吾嘗欲一詣象頭山親奉香火以答 神德者多年矣獨奈世務絆身不能遂情願深以爲憾其人曰若是乎君其得小符崇奉之與親奉香火何擇但小符最艱於得何則院主一代所出有限而求者極夥或其嚮所受之人信心不固崇奉少怠則符不安其家而他移焉若天假良緣遭其機會以得展轉相傳幸甚矣然是不可必惟君誠心求之或可得也自是渴仰小符夢寐莫忘旣而歸江戶緝訪猶嚴居住未便乃潛踪上總寓於某寺當時天地踟躕茹苦亦極猶貼 神名於屋柱朝夕禮拜積誠默禱居僅四五月忽蒙恩釋飯得再住江戶其 神德感應之速不啻影響嗣後信心愈固奉禮益虔惟不得小符之爲憾一日適過杉邨某家語次聞象頭山院代某阿闍梨旅寓深川永代寺與某往來甚稔乃請某作紹介徑詣阿闍梨阿闍梨一見如舊款接極渥亘直舉胸情懇求小符而不能己已阿闍梨沈吟良久曰君少待焉讚岐國人高邨某今來住江戶其人傳之久矣頃聞其家屢不利益符爲祟也彼若肯相授亦爾家之利矣吾當爲君圖之君其信心勿怠亘叩謝以退其明日某突如而來授以小符且謂曰某性嗜酒懶放不事事獲罪於小符者幾多今朝適訪阿闍梨寓聞君誠心求符故以奉贈亘不堪驚喜傾貲酬之符豈易得哉而今忽有毋望之人茲

拜鼎來之貶殆是有神導之矣先是巨辱知於三緣山主震風凌雨每托幘幘又一天也遂仕爲用人大小事務莫不擔當嘗爲主公建議有所計畫以圖一山永遠之利已就緒矣丙戌七月忽嬰疾至十一月飲食不進危迫旦夕名醫束手無術巨奉小符於枕頭扶病盥漱立願度禱謂某年既六十死則死耳餘生何足惜但主公拯拔之恩萬不報一今而朝露溘至何能瞑目幸藉 神助以緩須臾使某終事則死亦心足矣 神其鑒之一心祈念晝夜無懈至是病稍輕可不數日即愈不啻病愈猶幸延餘命以得優終其事皆 神之賜也嗚呼 神德廣大洋洋昭著無叩不應無求不得非僅夢寐通靈也於是捐貲鳩工立行祠於私第以酬 神德更募善信之有財力者每年十月脩百味供於象頭山永以爲例因屬余記其始末刻諸貞珉以遠播四方又以永傳不朽惟恐余文拙陋不能奉揚 神德萬一也巨本姓多湖氏名實則江戶人其善信姓名悉附著于石陰亦善與人同意也云

文政十一年戊子冬十月 江戶後學朝川鼎撰 三緣山僧顯察書并題額

さて此碑を見て行く事數十歩巍然として聳ゆる高閣あり形式優秀結構温雅以て斯道の參考に資すへしこれ即毎夜當宮に献燈する所謂高燈籠にして慶應元年當國寒川郡萬歳講の寄附に係る高十五間一尺敷坪七坪餘なり閣の周圍には老松參差枝を垂れ南方には各種の樹木を植栽して散策に便す北神苑の稱ありもしこれ杜鵑一聲殘燈影白

き時に會せば優に俗塵を離脱するものあらむ。

森々老樹白雲齊夜閣高懸新月低裂帛有聲人矯首燈光青處一鵑啼 巖谷一六
百尺神標聳道傍賽人歸去夜蒼茫一聲橫掠杜鵑影燈暈耿於殘月光 森 春濤

寶物目錄

寶物目録

凡例

- 一、當宮寶物類を寶物、貴重品、什物、崇敬講社本部特別備品の四部に分別すと雖是整理上の便宜より出たる區分にして孰れも畢竟寶物類に外ならされは寶物目録なる題名の下に集録せり
- 一、國寶に指定せられたるものは前項四部の外特に一部として別記し祭器類は整理上の都合により前項の區分に拘らず
- 一、本目録は各其品種に従ひ類別したるも 皇室及皇族に係るものは品種に拘らず之を別丁に載す
- 一、一品にして二類以上に跨るものは其主なる品質の屬する區分に従ふ例令は皇族御筆蹟にして其御寄附に係るものは御筆蹟類に編入し又戦利の刀劍は刀劍類に屬せしめずして戦利品に編入したるか如し
- 一、本目録編纂中新に編入せられたるものにおいて追加として巻尾に記載せり其他編纂後の異動の如きは他日再刊を待て訂正せむとす

一、本目録を以て寶物館陳列品と對照せむとせば列品の題箋に記入せる略號を以て本目録の索引に照合すへし假令は題箋の略號貴文一とあらは索引に於て略號貴文とあるものと照合し其下に記入せる頁數によりて求むるところを知り得へし一、寶物類數百點の多きを算し到底一時に寶物館内に陳列すへからざるを以て時々陳列替あるへき豫定也故に本目録に記載の物品にして館内列品中に發見せざるものあるへし

寶物目録索引

第一種	宸翰類	寶物之部	八三頁
第二種	繪旨勅納品御料品類	國寶之部	八五頁
		寶物之部	八五頁
		貴重品之部	九〇頁
第三種	皇族御筆蹟類	寶物之部	九三頁
		貴重品之部	九三頁
		崇敬講社本部特別備品之部	九五頁
第四種	皇族御寄附品類	寶物之部	九七頁
		祭器類 (祭器)	九九頁
第五種			七七

第六種

文書類

寶物之部 (寶文)

一〇二頁

貴重品之部 (貴文)

一〇七頁

第七種

書畫類

國寶之部 (寶書)

一一一頁

寶物之部 (寶書)

一一五頁

貴重品之部 (貴書)

一二二頁

什物之部 (什書)

一三六頁

崇敬講社本部特別備品之部 (講書)

一三九頁

第八種

扁額屏風類

寶物之部 (寶扁)

一四一頁

貴重品之部 (貴扁)

一四五頁

什物之部 (什扁)

一四八頁

崇敬講社本部特別備品之部 (講扁)

一五〇頁

第九種

棟札類

寶物之部 (寶棟)

一五三頁

貴重品之部 (貴棟)

一五三頁

第十種

刀劍類

寶物之部 (寶刀)

一五五頁

貴重品之部 (貴刀)

一五九頁

什物之部 (什刀)

一六四頁

第十一種

甲冑弓矢類

寶物之部 (寶甲)

一六七頁

貴重品之部 (貴甲)

一六九頁

什物之部 (什甲)

一七一頁

第十二種

戰利品戰時獲得品類

寶物之部 (寶戰)

一七三頁

貴重品之部 (貴戰)

一七五頁

什物之部 (什戰)

一七六頁

第十三種

金錢類

第十四種

寶物之部 (寶金)
貴重品之部 (貴金)

一八一頁
一八三頁

樂器類

寶物之部 (寶樂)

一八七頁

貴重品之部 (貴樂)

一八九頁

什物之部 (什樂)

一八九頁

崇敬講社本部特別備品之部 (講樂)

一九〇頁

第十五種

彫塑像佛具類

寶物之部 (寶彫)

一九一頁

第十六種

雜品類

寶物之部 (寶雜)

一九五頁

貴重品之部 (貴雜)

二〇一頁

什物之部 (什雜)

二〇四頁

崇敬講社本部特別備品之部 (講雜)

二〇八頁

追加之部

二〇九頁

寶物類統計表

整理上ノ區分ニヨル統計

品種ニヨル統計

二二五頁
二二五頁

第一種 宸翰類

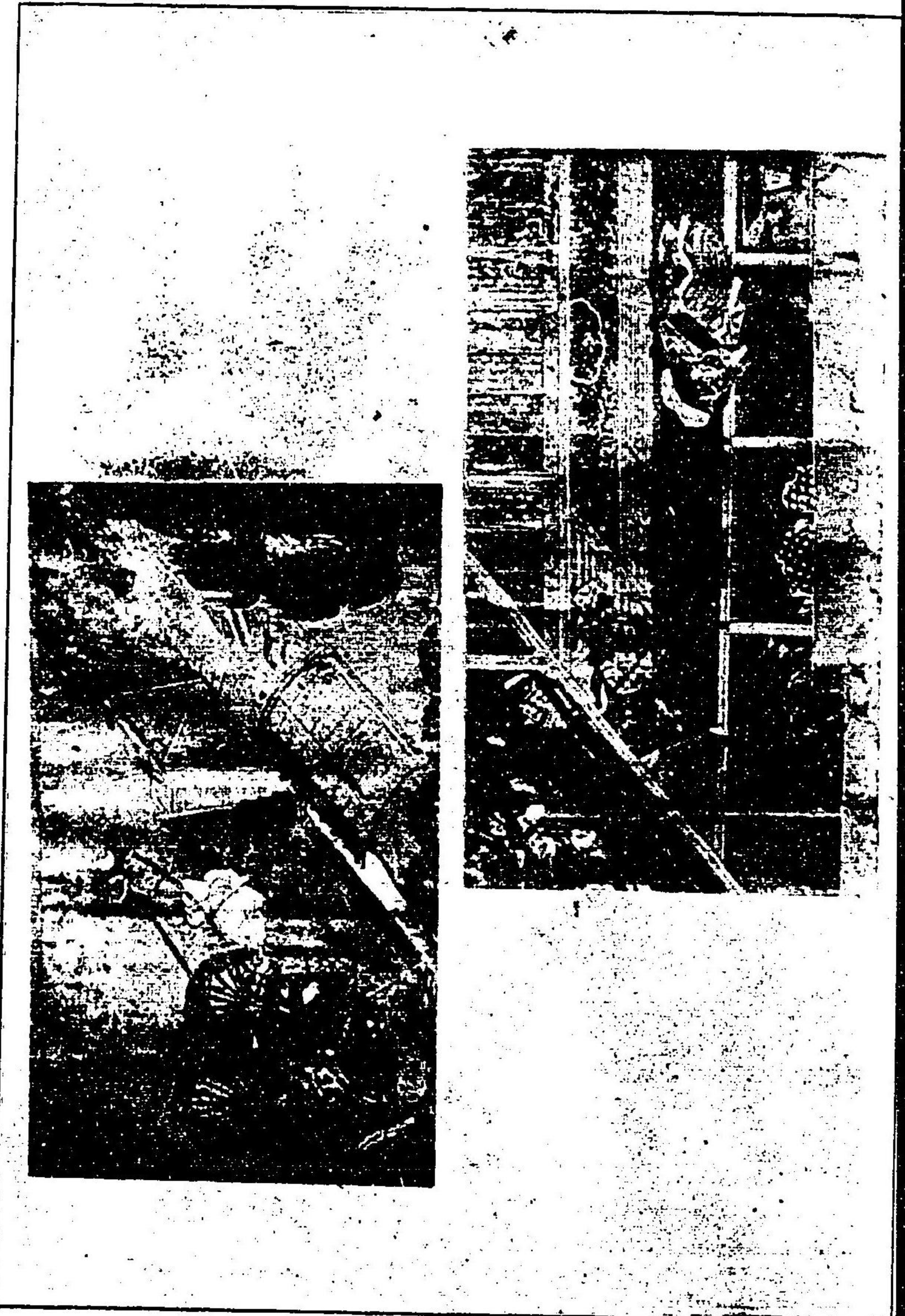
寶物之部

- (寶書一) 崇徳天皇宸翰 一聲に云々 一幅
- (寶書五) 崇徳天皇宸翰 般若心經 紺紙金泥 一卷
- (寶書六) 後伏見天皇宸翰 御詠草 紙本墨書 一卷
- (寶書三) 後醍醐天皇宸翰 吉野御懷紙 紙本墨書 足引の云々 一幅
- (寶書三) 後圓融天皇宸翰 御色紙 水の面に云々 一幅
- (寶書四) 後花園天皇宸翰 御小色紙 うちかはへて云々 一幅
- (寶書五) 後奈良天皇宸翰 御懷紙 雲はれて云々 一幅
- (寶書六) 後奈良天皇宸翰 御懷紙 うれしさを云々 一幅
- (寶書七) 正親町天皇宸翰 御色紙 秋はてゝ云々 一幅
- (寶書八) 後陽成天皇宸翰 御懷紙 昨日かも云々 一幅
- (寶書九) 後陽成天皇宸翰 御懷紙 思はずや云々 一幅
- (寶書二) 後陽成天皇宸翰 御懷紙 枕をそはたて云々 一幅

(寶書二) 後水尾天皇宸翰 御色紙 今よりの云々
 (寶書三) 後水尾天皇宸翰 御色紙 先たちて云々
 (寶書三) 後水尾天皇宸翰 御小色紙 色かはる云々

一幅 一幅 一幅

寶書 祭具竹物諸繪卷の一部



(八五頁参照)

第二種 繪旨勅納品御料品類

國寶之部

(寶書七〇)

奈興竹物語 紙本著色

一卷

社傳大納言爲家書藤原隆能畫

臨時全國寶物取調局鑑査曰世尊寺家經書高階隆兼畫

一卷ノ經緯 經一尺〇四分 緯四丈六尺〇九分

奈興竹物語一云鳴門中將物語或云吳竹物語

元准勅封御品

明治二十四年六月二十六日臨時全國寶物取調局ニ於テ優等ニシテ美

術上ノ模範トナルヘキモノト認定セララル

明治三十四年三月二十七日內務省告示第二十號ヲ以テ國寶甲種三等

ニ定メラル (挿圖參照)

寶物之部

(寶文二) 桃園天皇繪旨 淡墨紙本墨書 一通 寶曆十年五月廿日
繪旨云

金毘羅大權現者讚岐國所在之一社不在于他彌依
御崇信宜為

勅願所奉祈天下安全寶祚延長者依
天氣執達如件

寶曆十年五月廿日

右中將 花押

金光院權僧正御房

(寶文三) 孝明天皇繪旨 淡墨紙本墨書 一通 文久三年三月四日
繪旨云

近來外夷追日跋扈深被惱

宸衷將蠻夷拒絕之期限被決定之處此頃既英夷之軍艦來橫濱請求之旨
趣必可開兵端之情態顯然實天下安危在於是時矣庶幾依 神明冥助
以奮起 皇國之勇威國內一和上下齊志早攘醜夷于汎海之遠永令絕
於覬覦之意念不汚 神州不損人民

寶祚延長武運悠久御祈可抽丹誠可令下知于讚岐國 金毘羅大權現

別當給者依

天氣上啓如件

三月四日

右少辨俊政

謹上左宰相中將殿

(寶文三) 今上天皇御宣命 黃紙墨書 一通 慶應四年八月十八日
(寶文三) 今上天皇御祭文 白紙墨書 一通 明治十八年六月十四日

御祭文云

天皇乃大命余坐世挂卷母恐支

事比羅宮乃大前余愛媛縣大書記官從六位湯川彰乎使止為互白給波久
止白左久古與利最母尊美祭良世給倍留例乎以互前年國幣小社止定奉
給比志乎此度猶其廣久厚支恩賴乎思保志食須賀故余更余國幣中社止
崇奉互御幣帛奉出志齋祭良世給布故此狀乎聞食互
天皇乃大朝廷乎始互仕奉留百官人等四方國乃公民余至留萬互余伊加
志夜具波延乃如久立榮志米給倍止白給布

天皇乃大命乎聞食世止恐美恐美母白須

明治十八年六月十四日

(寶文函)

今上天皇御祭文謄本 白紙墨書 一通

御祭文云

天皇乃大命余坐世挂卷母恐支

事比羅宮乃大前余香川縣書記官從七位石津正一乎使止爲豆白給波久止白左久今度

大朝廷乃掟止志豆皇室典範乎定米又惟神奈留大支政乃隨余受繼治米給倍留食國乎平穩余安寧久天下公民庶余福祉乎得世志米給布止爲豆皇御國乃憲法乎制定米發布良志給布故此狀乎告奉留止爲豆御幣帛奉利齋祭良世給布事乎聞食豆

天皇乃大御代乎動久事無久左夜具事無久彌益々余

天皇乃大命乎聞食世止恐美恐美母白須

(寶文函)

今上天皇御祭文 白紙墨書 一通 明治三十七年二月二十三日

御祭文云

天皇乃大命余坐世挂卷母恐支

金刀比羅宮乃大前余香川縣知事正四位勳三等小野田元濤乎使止爲豆白給波久止白左久天津日嗣知食志與利以來萬機乃御政乎執行比給布止志豆外國乃交際波殊余平和乎宗止志豆大座志余今年計良須母露國余對比豆戰乎開久事止奈利志波已倍久母阿良奴事止奈母思食須故此由乎告奉留止志豆禮代乃御幣帛奉出給布事乎平良氣久安良氣久聞食豆海路陸路余射向布寇等乎速余伐平良氣食國乃大御稜威乎天下余照輝加志平和乎弥遠長余克復左志米常石余堅石余守幸倍給倍止白給布天皇乃大命乎聞食世止恐美恐美母白須

明治參拾七年貳月貳拾參日

(寶金二)

後水尾天皇勅納大佛大判金 量目四十四匁 一枚

(寶刀四)

今上天皇勅納御短刀 筑前住國弘作 長九寸一分 中心二寸八分五厘

燒刃亂 目釘穴二 鉏金著一枚 鞘白木 替鞘白木 袋赤地大和錦

明治十六年四月十四日勅納 一口 (一〇六頁及插圖參照)

(寶雜二)

青瓷御華瓶

一對

淨牡丹手

口亘七寸九分 高二尺九分

元准勅封御品

(寶刀二)

崇德天皇御料御鏝

一者金桐御紋形

一者銀菊御紋形

二個

元准勅封御品

(寶雜八)

崇德天皇御料十二連御鏡

所傳

一面

讚岐鶉足郡宇多津村畑泰親寄附

(寶雜三)

崇德天皇御料御笏

所傳

一握

讚岐鶉足郡宇多津村畑泰親寄附

(寶雜二)

光格天皇御料御硯箱 (插圖參照)

一個

藤中納言局寄附

(寶雜五)

朱檀木地牡丹獅子圖金高蒔繪

金具銀

(寶雜四)

光格天皇御料御褥

一重

梅小路正三位參議定肖寄附

(寶雜一)

表白地綾菊花菊葉繡

緣赤地大和錦

下敷青地緞子松竹梅文様

梅小路正三位參議定肖寄附

(寶雜七)

英照皇太后御料御柏扇

所傳

表松竹梅裏蝶鳥文様

一握

貴重品之部

(寶樂七)

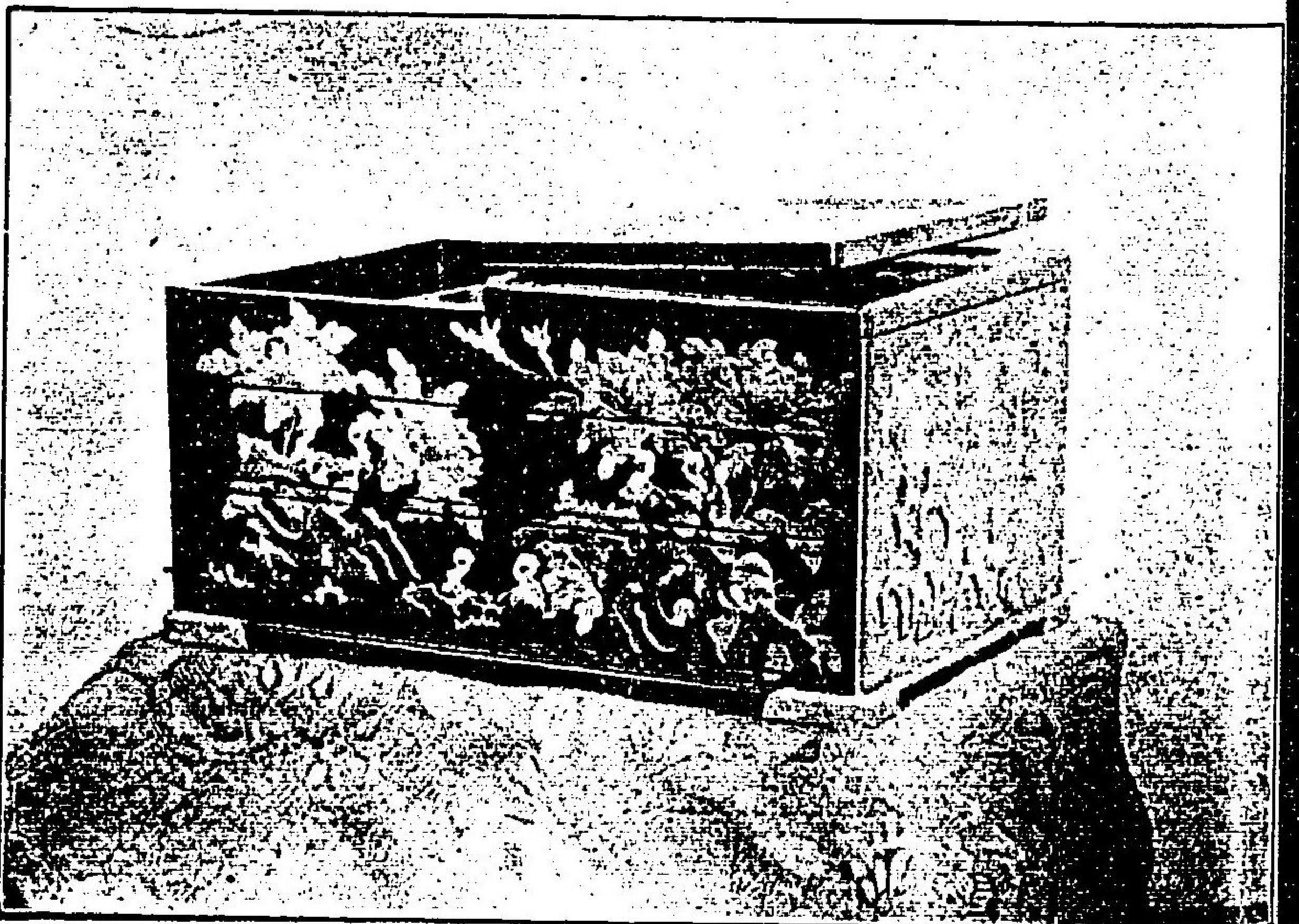
英照皇太后御料御柏扇

所傳 表松竹梅裏蝶鳥文様

一握



(八九頁參照)



(九〇頁參照)

(貴樂八) 英照皇太后御料御袖扇〔所傳〕表松裏蝶鳥文様 一握

第三種 皇族御筆蹟類

寶物之部

- (寶書二四) 伏見宮邦永親王御筆 懷紙 一幅
- (寶書二五) 高松宮好仁親王御筆 懷紙 一幅
- (寶書二六) 道晃親王御筆 額字 語云金毘羅大權現 一幅
- (寶書二七) 尊圓親王御筆 消息卷 一卷
- (寶書二八) 良純親王御筆 和歌卷 一卷
- (寶書二九) 道晃親王御筆 額 語云金毘羅大權現 一面

貴重品之部

- (貴書三) 竹内宮良尙親王御筆 一幅 高松城主松平讃岐守頼重寄附
 - (貴書三) 竹内宮良尙親王御筆 語云象頭山 一幅 同
 - (貴書四) 山階宮晃親王御筆 懷紙 一幅 山階宮御參拜記念ノ爲御寄附
- 明治二十二年六月讃岐の國金刀比羅神社にまうてける時

大勳位晃親王

このかみのおほみひかりのかしこさはとつくにまでもあふくことさく

(貴書 五) 有栖川宮熾仁親王御筆 賢所尊號 一幅

(貴書 四〇) 有栖川宮熾仁親王御筆 額字 語云事比羅宮 二枚 有栖川宮 御寄附

(貴書 四一) 有栖川宮熾仁親王御筆 額字 語云賢木門 二枚 同宮 御寄附

(貴書 四二) 有栖川宮熾仁親王御筆 額字 語云琴平山 二枚 同宮 御寄附

(貴書 四三) 小松宮彰仁親王御筆 額字 語云壽且昌 一枚

(貴書 四四) 伏見宮貞愛親王御筆 短冊 一枚 小松宮御參拜記念ノ爲御寄附

伏見宮御參拜記念ノ爲御寄附 貞愛

琴平の社にまうて、

神のます琴平山の月かけにくもりなき世の光をそしる

(貴扁 六) 寶鏡寺宮御筆 額 語云金毘羅大權現 紫地金書 一面

諏方加兵衛寄附

(貴扁 二) 小松宮彰仁親王御筆 額 語云瑞色鮮 絹本 隸書 一枚

小松宮御參拜記念ノ爲御寄附

(貴書 三三) 伏見宮文秀女王御筆 懷紙 一 同宮御參拜記念ノ爲御寄附

社頭祈世 文秀女王

大君のみよを八千代と瑞かきにいのるまことは神もうくらむ

崇敬講社本部特別備品之部

(講扁 一) 有栖川宮熾仁親王御筆 額 語云敬神尊王 絹本墨書 一面

第四種 皇族御寄附品類

寶物之部

(寶刀五)

有栖川宮熾仁親王御寄附 太刀 肥前國忠吉作 一振

有栖川宮御附從六位藤井希璞添翰添

(寶雜六)

有栖川宮熾仁親王御寄附 銅鏡桐竹菊花鳳凰模樣 一面

有栖川宮御附從六位藤井希璞添翰添

第五種 祭器類 (祭器)

(祭器) 御弓 黒漆 赤地大和錦袋添 二張

(祭漆) 御矢 白羽 黒漆篋 尖簇 百二十八枝

(祭器) 御楯 黒漆金泥御紋章 二面

(祭器) 御弓 朱漆 赤地大和錦袋添 二張

(祭器) 御矢 山鳥羽 尖簇 八十枝

(祭器) 御楯 櫻木地御紋章櫻花金蒔繪 二面

(祭器) 御巴 黒漆鞆繪金泥繪 赤地大和錦袋添 二個

(祭器) 御鉾 鉾黒漆 曲玉一連附屬 二本

(祭器) 御鉾 鉾鐵 柄黒漆 鏤桑形日蔭蔓毛彫 吹散青地大和錦 二本

(祭器) 御旗 鉾黄銅 柄黒漆 鏤圓形魚子地日蔭蔓浮彫 旗兩面蜀江錦御紋章

金絲織出長一丈二尺五寸幅二尺三寸 房水色蛇腹華鬘結 化粧絹紅白

綾御紋章日蔭蔓文様四條 二本

(祭器) 御旗 同上但化粧絹文様菊水青海波松竹梅 二本

- (祭器) 御錦蓋 帳金絲織梅花文樣 水引緋緞子御紋章金絲織出 一指
- (祭器) 御絹傘 柄螺鈿御紋章散 一本
- (祭器) 御翳 二本
- (祭器) 御几帳 白地綾雲立涌文樣 一垂
- (祭器) 御几帳 白綾固織日蔭蔓立涌地紋菊花御紋章丸金御紋章散 一垂
- (祭器) 神主舞裝束 一具
- (祭器) 諸司舞裝束 一具
- (祭器) 葱花燈 一基

第六種 文書類

寶物之部 (寶文)

(四) 攝政執達狀 白紙墨書

一通

日本一社金毘羅大權現今度
勅願所被 仰出間 寶祚長久之御祈禱彌無怠慢可被修行之旨攝政殿御
命之所候仍執啓如件

寶曆三年十二月廿二日

難波讚岐守 花押
保田内匠頭 花押

讚岐國金光院

法印權大僧都殿

- (五) 將軍足利義詮寄進狀 康安二年四月十五日平保盛署名 一通
- (六) 將軍足利義詮寄進狀 貞治元年三月十八日僧賴景署名 一通
- (七) 將軍足利義滿寄進狀 應安四年十一月十八日僧賴景署名 一通
- (八) 將軍足利義滿寄進狀 康曆元年九月十七日僧賴景署名 一通

- (九) 將軍足利義滿寄進狀 永德二年三月廿六日平景次署名 一通
- (一〇) 當宮神事記 觀應元年十月 宥範僧正筆 一冊
- (一一) 奉物日記 慶長廿年十月十一日 一冊
- (一二) 仙洞御所日記 一軸
- (一三) 仙石權兵衛秀久制札案 天正十三年八月十日 一通
- (一四) 仙石權兵衛秀久寄進狀 天正十三年十月十九日 一通
- (一五) 仙石權兵衛秀久寄進狀 天正十四年二月十三日 一通
- (一六) 仙石權兵衛秀久寄進狀 天正十四年八月廿四日 一通
- (一七) 生駒讚岐守一正寄進狀 天正十六年七月十八日 一通
- (一八) 生駒讚岐守一正寄進狀 天正十七年二月廿一日 一通
- (一九) 生駒讚岐守一正寄進狀 慶長五年十二月十三日 一通
- (二〇) 生駒讚岐守一正寄進狀 慶長六年三月二十八日 一通
- (二一) 生駒讚岐守一正書翰 慶長六年三月五日 一通
- (二二) 生駒讚岐守一正書翰 正月二十九日 一通
- (二三) 生駒讚岐守一正書翰 正月六日 一通

- (二四) 生駒讚岐守一正書翰 十月六日 一通
- (二五) 生駒讚岐守一正寄進狀 慶長十二年卯月二日生駒將監署名 一通
- (二六) 生駒讚岐守一正寄進狀 慶長十二年十月二十日淺井周防署名 一通
- (二七) 生駒讚岐守一正免許狀 慶長十四年九月六日 一通
- (二八) 生駒讚岐守一正寄進狀 正月十九日 一通
- (二九) 生駒讚岐守一正寄進狀 卯月二日淺井周防署名 一通
- (三〇) 生駒讚岐守正俊免許狀 慶長十五年八月七日淺田右京署名 一通
- (三一) 生駒讚岐守正俊免許狀 慶長十八年正月十四日 一通
- (三二) 生駒讚岐守正俊寄進狀 慶長十八年正月十六日尾池玄蕃伊曾權右門入谷外記 一通
- (三三) 署名
- (三四) 生駒讚岐守正俊免許狀 慶長十八年正月十六日尾池玄蕃伊曾權右門入谷外記 一通
- (三五) 署名
- (三六) 生駒讚岐守正俊寄進狀 元和四年三月十日 一通
- (三七) 生駒讚岐守正俊免許狀 九月五日淺田右京署名 一通
- (三八) 生駒讚岐守正俊寄進狀 九月廿一日淺井喜八郎署名 一通

- (三七) 生駒讚岐守正俊書翰 元和六年十月六日 一通
- (三八) 生駒讚岐守正俊書翰 二月廿日 一通
- (三九) 生駒讚岐守正俊書翰 五月九日 一通
- (四〇) 生駒讚岐守正俊書翰 六月三日 一通
- (四一) 生駒讚岐守正俊書翰 八月廿一日 一通
- (四二) 生駒讚岐守正俊書翰 十月廿八日 一通
- (四三) 生駒讚岐守正俊寄進狀 十一月九日 一通
- (四四) 生駒小法師高俊寄進狀 元和七年十一月廿八日 一通
- (四五) 生駒小法師高俊免許狀 元和七年十一月廿八日 一通
- (四六) 當山緣起 讚岐高松城主松平右京大夫源賴重撰并書 絹本墨書 一軸
- (四七) 箱黒髭同裏梨子地稚松金蔭繪 明曆二年 高松城主松平右京大夫賴重寄附
- (四八) 當山緣起添書 承應四年前南禪見僧錄最嶽叟元良撰并書 一軸
- (四九) 松平讚岐守賴重願文 寬文五乙巳九月廿八日 一通
- 源賴重掛毛畏幾
- 金毘羅大權現能宇豆濃廣前仁恐美恐美毛申壽夫神明光乎和介天有緣乃地仁

鎮坐志通力意能如仁之天可度能機乎擁護之太麻布是介因天步於運倍波感應
 揭焉之久憑於係禮波利生歷然太利方仁今大姬能有身於祝之天當產能平安乎
 祈留是乎以天禮奠於設介幣帛於奉利願文於捧天神德於仰久伏天冀久波太神
 濃廣幾御助介厚幾御惠仁天哀感納受於垂太麻比生產安寧母子堅固病毛無久
 患毛無久身心快樂福壽增長仁之天常盤堅盤余夜乃守日乃守受護幸賜倍止恐
 美恐美毛申壽

寬文第五乙巳曆九月二十八日 源賴重敬白

(四九) 松平讚岐守賴重願文 寬文十一年八月廿一日 一通

敬白願文

今度遂參勤心中所願相叶令悉地成就於致歸國者直可奉參詣寶前也

寬文十一年八月二十一日 源賴重敬白

金毘羅大權現 寶前

- (五〇) 松平讚岐守賴重弓外七點寄進目錄 四月廿六日 一通
- (五一) 高松隱士書翰 三月廿七日 一通
- (五二) 高松隱士書翰添書 三月廿八日雜賀平左衛門署名 一通

- (五三) 高松隱士書 翰添書四月五日横倉久右衛門竹井金左衛門署名 一通
- (五四) 神祇官符 明治元年七月宮號勅定 一通
- (五五) 神祇官符 明治元年七月宮號勅定官符添書 一通
- (五六) 太政官符 明治四年辛未六月國幣小社勅定 一通
- (五七) 神祇官符 明治四年辛未六月國幣小社勅定官符添書 一通
- (五八) 神祇官符 明治四年辛未六月國幣小社勅定ニ付キ管轄替達書 一通
- (五九) 神祇官符 明治四年辛未十月十五日大嘗祭班幣目錄 一通
- (六〇) 神祇官符 明治四年十一月四日達書 一通
- (六一) 宮内省符 明治十六年四月十四日付 (八九頁參照) 一通

事比羅宮宮司

今般

思食ヲ以白鞆御短刀筑前國住左國弘作一口御寄附被遊候旨被仰出候事

明治十六年四月十四日

宮内省

(六三) 宮内省符 明治二十一年四月十七日保存金御下賜達書 一通

事比羅宮宮司

今般其神社保存會設立之趣被

聞食金三百圓下賜候事

明治廿一年四月十七日

宮内省

貴重品之部 (貴文)

- (一) 將軍德川家光朱印狀謄本 慶安元年二月廿四日 一通
- (二) 將軍德川家綱朱印狀謄本 寛文五年七月十一日 一通
- (三) 將軍德川綱吉朱印狀模本 貞享二年六月十一日 一通
- (四) 將軍德川綱吉朱印狀謄本 貞享二年六月十一日 一通
- (五) 將軍德川吉宗朱印狀謄本 享保三年七月十一日 一通
- (六) 將軍德川家重朱印狀謄本 延享四年八月十一日 一通
- (七) 將軍德川家治朱印狀謄本 寶曆十二年八月十一日 一通

- (八) 將軍德川家齊朱印狀謄本 天明八年九月十一日 一通
- (九) 將軍德川家慶朱印狀謄本 天保十年九月十一日 一通
- (一〇) 將軍德川家定朱印狀謄本 安政二年九月十一日 一通
- (一一) 將軍德川家茂朱印狀謄本 萬延元年九月十一日 一通
- (一二) 六角越前守藤原廣治願文 元祿八年八月十五日 一通
- (一三) 松平越中守定永寄進狀 天保三年四月朔日 一通
- (一四) 太政官牒模本 元岡田為恭藏品 一軸
- (一五) 民部省符模本 元岡田為恭藏品 一軸
- (一六) 弘福寺土地券牒模本 元岡田為恭藏品 一軸
- (一七) 弘福寺土地券牒模本 元岡田為恭藏品 一軸
- (一八) 土地券文模本 元岡田為恭藏品 一軸
- (一九) 東大寺牒狀模本 元岡田為恭藏品 一軸
- (二〇) 慈圓法師願文模本 元岡田為恭藏品 一軸
- (二一) 正稅帳謄本 元岡田為恭藏品 三軸
- (二二) 壘田古書謄本 元岡田為恭藏品 一軸

- (三) 奉行院司雅俊朝臣記 元岡田為恭藏品 一軸
- (四) 沙門空海入唐請來目錄 元岡田為恭藏品 一軸
- (五) 橘氏處分狀 元岡田為恭藏品 一軸
- (六) 仁和寺宮灰筋塀御寄進狀 大高檀紙 一通

灰筋塀 百間
 右依有御願之子細被寄附于其社頭處也者依
 總法務宮令命執達如件

文政十三年三月廿五日

久富遠江守 華押
 芝築地總在廳 華押
 橋本民部卿 華押

象頭山金光院宥天芳禱

國寶 辨財天十五童子像 傳云巨勢金剛筆



(一一一頁参照)



國寶 社務所美書院上段床張附 圓山隱舉筆

(一一頁參照)

第七種 書畫類

國寶之部 (寶書)

(三六) 辨財天十五童子像 傳云巨勢金岡筆 絹本着色 無款 一幅 (插圖參照)

經四尺二寸五分 緯一尺七寸四分 箱書云春日社御祓講本尊云々

明治三十四年三月二十七日內務省告示第二十號ヲ以テ甲種四等國寶

ニ定メラル

(九〇) 社務所表書院張附并襖繪畫 圓山應舉筆 紙本金砂子地墨畫

上段 (稱表上段)

床張附正面左右共

瀑布古松圖

三枚 (插圖參照)

張臺襖

山水樓閣圖

四枚

火燈口明障子腰張

野山稚松圖

四枚

火燈口兩脇張附

野山稚松圖

二枚

火燈口左側張附

野山稚松圖

一枚

火燈口右側張附

無地

一枚

違棚下袋戸張附

野山稚松圖

二枚

違棚橫脇張附

野山圖

一枚

左右違棚下及框張附

無地

五枚

二ノ間

襖

春景山水圖

四枚

長押下張附

春景山水圖

二枚

明障子腰張

右 河邊新竹圖

二枚

左 野山稚松圖

二枚

款云寛政甲寅初冬寫平安源應舉

以上、明治二十四年七月九日臨時全國寶物取調局ニ於テ優等ニシ

テ美術上ノ模範トシテ要用ナルヘキモノト認定セラレ

以上、明治三十四年三月二十七日内務省告示第二十號ヲ以テ甲種

三等國寶ニ定メラル

右瀑布圖ハ丹波國保津川ノ水源ヲ描寫セルカ如シ保津

川ハ山城ニ入リテ桂川(一名大井川ト云)ト稱シ嵐山ノ

東麓ヲ流ル

七賢ノ間

襖

竹林七賢人圖

八枚

明障子腰張

岩竹圖

八枚

虎ノ間
襖

遊虎圖

十六枚

明障子腰張

岩松圖

八枚

款云天明七丁未夏月寫平安源應舉

鶴ノ間

床張附正面左右共

稚松雙鶴圖

三枚

襖

稚松丹頂圖

四枚

明障子腰張

稚松圖

二枚

襖

蘆丹頂圖

四枚

明障子腰張

蘆圖

四枚

以上 明治二十四年七月九日臨時全國寶物取調局ニ於テ優等ニシ

テ美術上ノ模範トシテ要用ナルヘキモノト認定セララル

以上 明治三十四年三月二十七日內務省告示第二十號ヲ以テ甲種

四等國寶ニ定メラル

寶物之部 (寶書)

(二七) 牡丹花畫贊 絹本著色 贊和歌一首 一幅

書良應親王御筆 畫式部丞丹波賴庸筆

(二九) 小色紙 攝政藤原良經筆 紙本和歌 一幅

大色紙 中納言藤原定家筆 紙本和歌 一幅 讚岐高松 牧野猶右衛門寄附

(三) 豐臣秀次朝鮮征討下知狀 在秀次印章 一幅

文云 來三月大閣御方就高麗御渡海國々諸奉公人之儀去年正月以五箇條
守被仰出候間高麗并名護屋在陣之面々に奉公たるものくつろきとして□
歸村有之者侍中間小者あらし子に至迄當月中に名護屋へ可參陣若背法度
諸國在々所々に於隱居は其者之事者不及沙汰類身其所之代官給人別而地
下人越度可爲曲事者也

文祿二年正月 日

□州にて金森出雲守留守居中

- (三) 扇面謠曲 傳云徳川家光筆 金地墨書 一幅
- (三) 竹雀圖 傳云徳川家綱筆 紙本墨畫 一幅
- (四) 尾張大納言徳川義直書翰 紙本墨書 一幅
- (五) 尾張中納言徳川吉通書翰 紙本墨書 一幅
- (六) 白鷹圖 宋徽宗皇帝筆 絹本著色 一幅
- (七) 般若心經 弘法大師空海筆 紙本墨書 世稱鼠跡心經 一幅
- 欸云沙門空海 經卷ノ裏面ニ書ス

(八) 阿彌陀名號 傳云弘法大師空海筆 紙本墨書 一幅

世稱字々名號 細字名號ヲ書連テテ大字名號トナセルモノ

(九) 大黒天像 傳云弘法大師空海筆 紙本著色 一幅

世稱千體大黒 一幅中ニ大黒天像實數ノ千軀アリ

(一〇) 阿彌陀名號 傳云弘法大師空海筆 紙本墨書 一幅

世稱十界名號 文字中ニ十界ノ圖アリ

(一一) 大威徳明王像 傳云弘法大師空海筆 絹本著色 一幅

(一二) 不動明王像 傳云智證大師圓珍筆 絹本著色 一幅

世稱血不動 傳云智證大師入唐ノ時誓願ノ爲當宮へ寄附スト

明治二十四年六月二十六日臨時全國寶物取調局ニ於テ美術

上ノ參攷トナルヘキモノト認定セラル

(一三) 三尊阿彌陀佛像 傳云中將姫法如筆 絹本金泥畫 一幅

世稱植髮阿彌陀 像ノ頭髮ニハ人髮ヲ植ウ

(一四) 阿彌陀名號 傳云明惠上人高辨筆 紺紙金泥 一幅

世稱蓮華形名號 蓮ノ花瓣ヲ畫キテ字畫トナス

(三) 不動種子 傳云興教大師覺錢筆 絹本著色 一幅

中央ニ金泥ヲ以テ種字(梵字)ヲ書シ左右ニ俱利迦羅龍及制呾迦童子ヲ書ク

(三) 不動明王及二童子像 傳云巨勢金岡筆 絹本著色 一幅

迦瑠羅炎異様ナルヲ以テ稱セラル

(三) 釋迦三尊十六羅漢像 傳云僧明兆筆 絹本著色 三幅

(三) 楊柳觀音像 傳云僧明兆筆 絹本著色 一幅

明治二十四年七月十四日臨時全國寶物取調局ニ於テ全國寶

物參攷簿ニ登錄セラル

(四) 白衣觀音像 僧雪舟筆 紙本墨畫 一幅

柳下平十郎寄附

世稱圓觀音(圖中ニ像アリ依リテ稱ス)

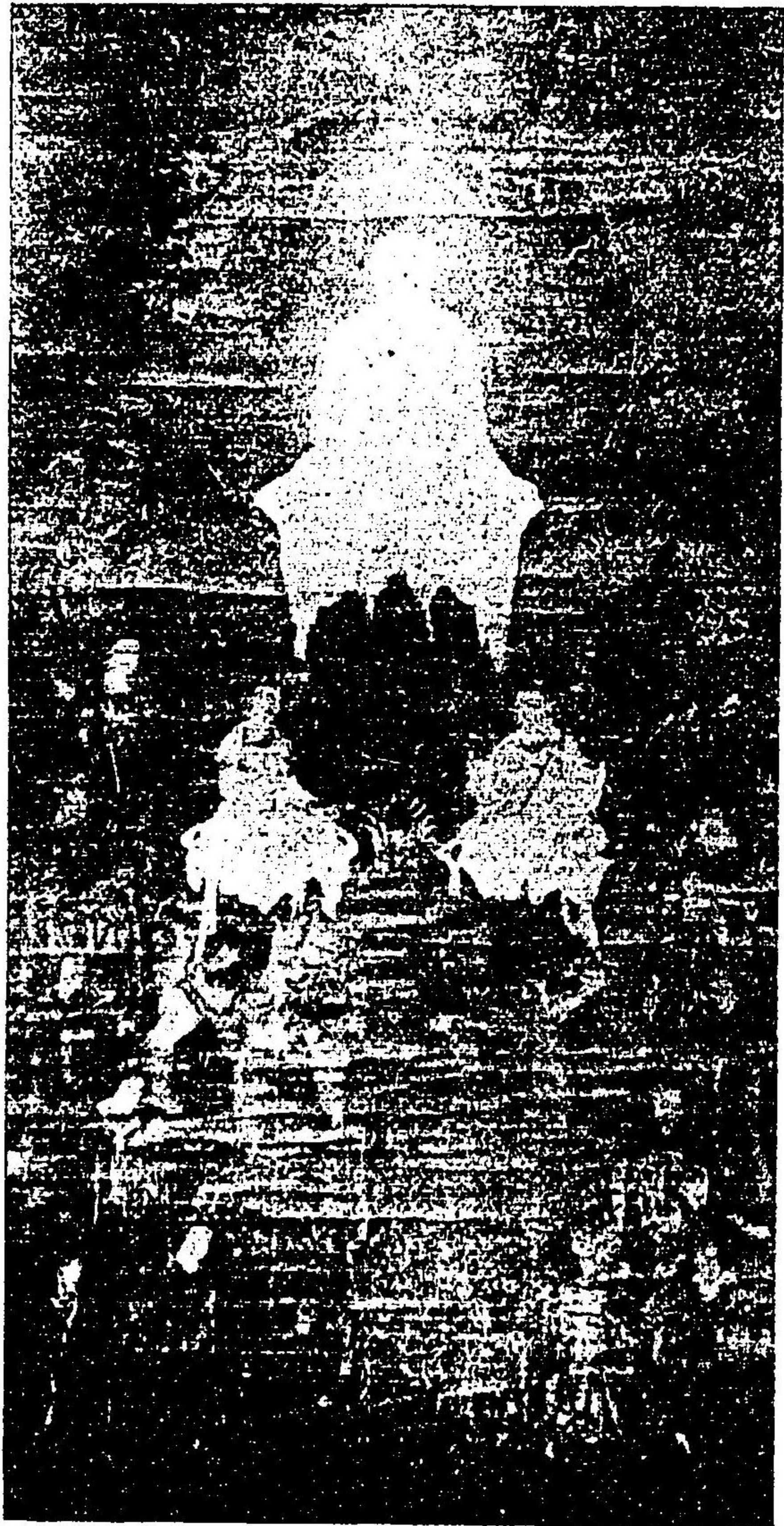
(四) 童形文珠菩薩像 土佐光益筆 紙本著色 一幅

(四) 釋迦三尊十六善神像 筆者不詳 絹本著色 一幅 (挿圖參照)

明治二十四年六月二十六日臨時全國寶物取調局ニ於テ美術

上ノ參攷トナルヘキモノト認定セラル

釋迦三尊十六善神像 筆者不詳



(一一八頁參照)

- (四) 歌切 寂蓮法師筆 紙本墨書 一幅
- (四) 歌切 西行法師圓位筆 紙本墨書 一幅
- (四) 野牛圖 狩野元信筆 紙本墨畫 一幅
- (四) 知章醉騎圖 傳云狩野元信筆 紙本墨畫 一幅
- (四) 童形文珠菩薩騎獅像并牡丹圖 狩野探幽齋守信筆 三幅
- 絹本著色 讚岐高松城主松平讚岐守賴聰寄附
- (四) 虎圖 狩野探幽守信筆 絹本墨畫 一幅
- (四) 櫻下遊馬圖 狩野永真安信筆 絹本著色 一幅
- (五) 蕪菁圖 僧雪村筆 紙本墨畫 一幅
- (五) 鯉魚圖 長澤蘆雪筆 紙本墨畫 一幅
- (五) 瓜茄子圖 宋牧溪筆 紙本墨畫 一幅
- (五) 雲龍圖 宋陳所翁筆 絹本墨畫 一幅
- (五) 雲龍圖 宋陳所翁筆 絹本墨畫 一幅
- (五) 蘇武別李陵圖 傳云趙仲穆筆 墨畫 一幅
- (五) 牡丹孔雀圖 周之冕筆 絹本著色 一幅
- 伊豫和氣郡堀江村西山徵寄附

- (三) 尊勝陀羅尼經 傳云弘法大師空海筆 紙本墨書 一軸
- (四) 般若心經 權大納言公全筆 紺紙金泥 一軸
- (五) 法華經 筆者不詳 紺紙金泥 八軸 高松城主松平讚岐守賴重寄附
- (六) 金剛不空三摩耶經 筆者不詳 紺紙金泥 二軸 薩摩國 島津義弘寄附
- (七) 金光明最勝王經 筆者不詳 紺紙金泥 十軸 長修理寄附
- (八) 金剛頂瑜伽經 前山寺量界房筆 一軸
- (九) 觀佛三昧海經 筆者不詳 一軸
- (十) 崇徳院御影堂法樂和歌 一軸
- (十一) 百韻和歌 奥書云慶安五年壬辰三月中旬宗好 一軸
- (十二) 連歌百韻 奥書云寛永十有一陽春日岩手治右衛門尉英方 一軸
- (十三) 御即位調度圖 紙本著色 筆者不詳 七軸
- (十四) 讚岐國栗山柴邦彦編輯 日野正二位藤原資枝鑒 御厨子所預從四位下若狹守紀宗直鑒
- (十五) 當山十二境詩 伊藤東涯筆 一軸
- (十六) 春日權現驗記模本 詞書ハ謄本ニシテ古川躬行筆 書ハ模本ニシテ岡田爲恭

筆 書ハ紙本墨書 書ハ絹本著色 一軸

- (十七) 寶永十七年讚岐國繪圖 紙本著色 一帖 大和國奈良 富田光美寄附
- (十八) 嘉元仙洞百首 吉田兼好筆 二帖 讚岐 生駒壹岐守高俊寄附
- (十九) 保元物語 筆者不詳 三帖 讚岐高松 花月兼黃愚寄附
- (二十) 平治物語 筆者不詳 三帖 松崎保寄附
- (二十一) 伊勢物語 山崎宗鑑筆 一帖 同人 寄附
- (二十二) 經切歌切手鑑 聖武天皇宸翰ヨリ連歌師壽慶ニ迄ル百三十八紙ヲ貼ス 一帖 同人 寄附
- (二十三) 短冊帖 後小松天皇宸翰ヨリ冷泉爲秀ニ迄ル二百二十二葉ヲ貼ス 一帖
- (二十四) 書畫手鑑 毘沙門堂公嚴ヨリ高辻豐永ニ迄ル百六紙ヲ貼ス 一帖
- (二十五) 一日千首短冊 道珍ヨリ伊那ニ迄ル五十七葉ヲ貼ス 一帖
- (二十六) 伊勢物語 牡丹花肖柏筆 一帖
- (二十七) 金剛般若波羅密經 清人蔣炳筆 紺紙金泥 一帖 濱東明佐野屋喜右衛門多
- (二十八) 田屋治兵衛吉本屋六兵衛山屋五兵衛鶴田屋庄三郎金尾屋直七郎谷本屋卯八炭屋理右衛門備前屋幸八岡本屋重吉寄附

- (八七) 源氏細流 筆者不詳 十冊
- (八八) 朗詠集 藤原實隆筆 一冊
- (八九) 伊勢物語 吉田兼好筆 一冊
- (九〇) 延寶三年當宮社領境目繪圖 紙本著色 一帖

貴重品之部 (貴書)

- (八) 大色紙 從一位近衛忠熙筆 紙本和歌 一幅
- (七) 大色紙 大納言綾小路有長筆 和歌 一幅
- (六) 色紙 藤原定家筆 古筆了伴極付 箱黒髭紅葉鹿金蒔繪 一枚
- (五) 古語 松平讚岐守頼重筆 紙本墨書 一幅
- (四) 牽牛花圖 狩野常信筆 紙本墨畫 一幅 石見六日市驛 廣兼繁子寄附
- (三) 柳鷺圖 狩野探信筆 絹本墨畫 一幅 同 廣兼昌作寄附
- (二) 出山釋迦梅竹圖 狩野尙信筆 紙本墨畫 三幅 狩野尙信寄附
- (一) 文殊菩薩普賢菩薩像 狩野宗秀筆 紙本墨畫 二幅
- (〇) 當山十二景圖 狩野時信筆 林氏贊 紙本著色 十二幅

- (二六) 古語 前正法石天井前妙心大梁筆 二幅 酒井備後守忠朝寄附
- (二七) 王昭君圖 大僧正祐常筆 絹本著色 一幅
- (二八) 蘭亭圖記 池大雅筆 絹本著色 一幅
- (二九) 落雁圖 宮本武藏筆 紙本墨畫 一幅 從七位曾根大太郎寄附
- (三〇) 山水圖 長町竹石筆 絹本墨畫 一幅
- (三一) 扇面旭日鶴龜圖 司馬江漢筆 絹本著色 一幅
- (三二) 網敷天神像 筆者不詳 紙本著色 一幅 京都人 某寄附
- (三三) 葡萄栗鼠圖 森寬齋筆 絹本墨畫 一幅 京都上京區 森寬齋寄附
- (三四) 森寬齋自筆奉納記一葉添附アリ其記云

月前葡萄栗鼠之圖 絹本墨物

此圖は去年の春東京繪畫共進會場に出す所の圖にして即品評のうえ褒賞として銀印得宜の二字を賜りしもの也然るに其元畫は洋人これをあかなひ求む故に又同じき圖を

聖上の詔を奉し再び畫き調進し奉る時にことし未の年繪事ありて登山せし折から社務よりも復これをもとめらる己に再三に及へりこゝにおゐて

意に謂われは速に其命にまかせ謹て畫きて以て賜ふ所の賞印を押し
神前に納め奉るなりされは今より後いつこよりのもとめあらんとも敢て
せさらんことを心に誓ひ同圖の筆を止ることしかりと云時

明治十六年癸未歲十月 平安寛齋森公肅謹書

- (四) 白鷹圖 宋徽宗皇帝筆 絹本著色 一幅
- (五) 福祿壽圖 傳云王元章筆 絹本著色 一幅
- (六) 當山十二境詩 京師萬年山主祖緣書 一軸
- (七) 當山十二境詩 熊谷立閑書 一軸
- (八) 當山十二境詩 皆川愿書 一軸
- (九) 當山十二境詩 弘文院林學士父子書 一軸
- (十) 當山十二境詩 前禪峰劉室叟宗安書 一軸
- (十一) 當山十二境詩 唐國沙門雷音博書 一軸
- (十二) 當山十二境詩 前南禪雲外東竺外五山諸僧書 一軸
- (十三) 當山十二境詩 藤澤恒書 一軸
- (十四) 當山十二境詩 江南宗愿福源元晃前福源祖璠書 一軸

- (十五) 當山十二景圖 狩野常真筆 著色 二軸
- (十六) 摩訶般若心經 從三位德川宗堯母吉子筆 紺紙金書 一軸
- (十七) 法華經 筆者不詳 紙本墨書 八軸 德川芳樹院寄附
- (十八) 法華經 酒井雅樂頭忠通筆 紺紙金書 一帖 姫路城主酒井雅樂頭忠通寄附
- (十九) 飭車圖 岡田爲恭筆 紙本著色 一軸
- (二十) 禮儀類典圖會膳本 紙本著色 一軸 京都 池村邦則寄附
- (二十一) 法樂連歌 宗養筆 永錄五年十一月 一軸
- (二十二) 法樂連歌 岩手次左衛英方筆 寛永六年 一軸
- (二十三) 支那地圖 六卷 讚岐國豊田郡觀音寺町北野久平北野増吉寄附
- (二十四) 御太刀圖 一軸 東京本郷區湯島天神町塚田秀鏡寄附
- (二十五) 象頭山緣起 松平右京大夫頼重書寫 一軸 高松城主松平讚岐守頼重寄附
- (二十六) 謠本江口 宗海筆 一軸 讚岐國琴平 菅善次寄附
- (二十七) 春日社遷宮調度目錄 但元岡田爲恭藏品 紙本墨書 一軸
- (二十八) 手向山八幡宮神寶圖 但全上 紙本著色 一軸
- (二十九) 正倉院寶物圖 但全上 紙本著色 二軸

- (五〇) 法隆寺寶物圖 但全上 紙本上卷著色下卷墨畫 二軸
- (五一) 春日神鹿鞍圖 但全上 紙本著色 一軸
- (五二) 奈與竹物語繪卷模本 但全上 紙本墨畫 一軸
- (五三) 類聚新要抄 但全上 紙本著色 三軸
- (五四) 承安五節圖模本 但全上 紙本墨畫 一軸
- (五五) 加茂御祖神社御蔭祭圖 但全上 紙本著色 一軸
- (五六) 蒙古襲來繪詞模本 但全上 紙本著色 二軸
- (五七) 平家公達卷模本 但全上 紙本墨畫 一軸
- (五八) 中殿御會圖模本 但全上 紙本著色 一軸
- (五九) 信貴山緣起飛倉卷模本 但全上 紙本著色 一軸
- (六〇) 信貴山緣起拔書 源恭義模 但全上 紙本著色 一軸
- (六一) 誓願寺緣起模本 但全上 紙本著色 二軸
- (六二) 清水寺緣起模本 但全上 紙本著色 一軸
- (六三) 唐招提寺緣起模本 但全上 紙本墨畫 一軸
- (六四) 粉川寺緣起模本 但全上 紙本著色 一軸

- (六五) 年中行事模本拜禮卷 但全上 紙本墨畫 一軸
- (六六) 同平野祭卷 但全上 紙本墨畫 一軸
- (六七) 同朝觀(羊)卷 但全上 紙本著色 一軸
- (六八) 同關白春日詣卷 但全上 紙本墨畫 一軸
- (六九) 同御燈卷 但全上 紙本墨畫 一軸
- (七〇) 同大饗卷 但全上 紙本墨畫 一軸
- (七一) 同著駄政卷 但全上 紙本墨畫 一軸
- (七二) 同賀茂臨時祭卷 但全上 紙本墨畫 一軸
- (七三) 同印地祭卷 但全上 紙本墨畫 一軸
- (七四) 同真言院修法并御齋會卷 但全上 紙本著色 一軸
- (七五) 同賀茂祭卷 但全上 紙本墨畫 二軸
- (七六) 同祭祀卷 但全上 紙本墨畫 一軸
- (七七) 法然繪傳模本 但全上 紙本 二十二軸
- (七八) 俵藤太雙紙模本 但全上 紙本墨畫 一軸
- (七九) 春日權現驗記模本 但全上 紙本 二十軸

- (八〇) 長谷寺緣起模本 岡田爲恭模 但全上 紙本墨書 二軸
- (八一) 山門僧傳模本 浮田一蕙模 但全上 紙本著色 一軸
- (八二) 承安五節圖模本 但全上 紙本著色 一軸
- (八三) 勝繪模本 但全上 紙本墨書 一軸
- (八四) 犬追物圖模本 但全上 紙本著色 一軸
- (八五) 古樂圖模本 但全上 紙本墨書 一軸
- (八六) 義經軍記繪卷模本 但全上 紙本著色 三軸
- (八七) 六波羅行幸繪詞模本 但全上 紙本墨書 一軸
- (八八) 長谷寺十三重塔供僧繪卷模本 但全上 紙本著色 一軸
- (八九) 尚齒會圖模本 但全上 紙本墨書 一軸
- (九〇) 後醍醐天皇宸影及藤原藤房像模本 但全上 紙本墨書 一軸
- (九一) 三十六歌仙像模本 但全上 紙本墨書 一軸
- (九二) 承久三年其注曆模本 但全上 紙本墨書 一軸
- (九三) 執筆法使筆法模本 但全上 紙本墨書 一軸
- (九四) 十二類合戰繪詞書模本 源行納模 但全上 紙本 三軸

- (九五) 佐理卿筆蹟模本 但全上 紙本墨書 一軸
- (九六) 神影及肖像模本 但全上 紙本墨書 二軸
- (九七) 畫師雙紙模本 但全上 紙本著色 一軸
- (九八) 親鸞上人繪傳模本 但全上 紙本著色 一軸
- (九九) 西園寺車繪圖模本 但全上 紙本著色 一軸
- (一〇〇) 行幸繪卷模本 但全上 紙本墨書 一軸
- (一〇一) 古瓦榻本 但全上 紙本 二軸
- (一〇二) 水鳥寫生圖 田中訥言筆 但全上 紙本著色 一軸
- (一〇三) 歌合圖 但全上 紙本著色 一軸
- (一〇四) 詩文影本 但全上 紙本墨書 一軸
- (一〇五) 山水屏風繪模本殘闕 但全上 紙本著色 三軸
- (一〇六) 佐用姬明神鬼面圖 但全上 紙本墨書 一軸
- (一〇七) 神寶平胡籙圖 但全上 紙本墨書 一軸
- (一〇八) 車輿圖 但全上 紙本 一軸墨書二軸著色 三軸
- (一〇九) 古人肖像 但全上 紙本墨書 三軸

- (二〇) 相撲舞樂圖下繪 但全上 紙本墨畫 一軸
- (二一) 武者繪粉本 但全上 紙本 一軸墨畫二軸著色 二軸
- (二二) 古代御車圖 石山三位師香畫 高丘三位季起書 但全上 紙本 一軸
- (二三) 裝束調度圖 岡田為恭筆 但全上 紙本 五軸
- (二四) 絲毛車繪圖 但全上 紙本墨畫 四枚
- (二五) 粉本 岡田為恭筆 但全上 紙本著色 一軸
- (二六) 類聚故實神寶卷 但全上 紙本著色 一軸
- (二七) 同假字卷 但全上 紙本墨畫 二軸
- (二八) 同古記錄卷 但全上 紙本墨畫 一軸
- (二九) 同紋樣卷 但全上 紙本墨畫 一軸
- (三〇) 同文房具卷 但全上 紙本墨畫 一軸
- (三一) 同屏風卷 但全上 紙本著色 一軸
- (三二) 同古瓦卷 但全上 紙本墨畫 一軸
- (三三) 同木器卷 但全上 紙本墨畫 一軸
- (三四) 類聚雜要鈔異本殘闕 但全上 紙本著色 一軸



(一三三頁參照)

社務所與書院及同上段襖床張附

- (二五) 太刀圖 但全上 紙本墨畫 三軸
- (二六) 官服著用圖 岡田爲恭筆 但全上 紙本墨畫 一軸
- (二七) 菅神像 岡田爲恭筆 但全上 紙本著色 一軸
- (二八) 神宮御神寶圖 但全上 紙本著色 二軸
- (二九) 天逆鉞圖 但全上 紙本墨畫 一軸
- (三〇) 古畫拔書 岡田爲恭筆 但全上 紙本墨畫 一軸
- (三一) 甲冑圖 但全上 紙本 一軸 墨畫一軸 著色 二軸
- (三二) 正倉院寶物圖 但全上 紙本墨畫 一軸
- (三三) 鳳輦葱花輦圖 岡田爲恭筆 但全上 紙本墨畫 一軸
- (三四) 今出河家傳領琵琶巖圖 但全上 紙本墨畫 一軸
- (三五) 古升圖 但全上 紙本著色 一軸
- (三六) 神代系圖 但全上 紙本墨畫 一軸
- (三七) 文集卷第四 但全上 紙本墨畫 一軸
- (三八) 金剛界瑜伽畧述 但全上 紙本墨畫 一軸
- (三九) 粉本 浮田一蕙筆 但全上 紙本著色 一軸

(一四) 書額字 伊達春山筆 語云大觀 紙本 一枚

從二位伊達宗紀寄附

(一四) 社務所與書院上段張附繪畫 伊藤若冲筆 紙本金砂子地著色

床張附正面左右共 (插圖參照)

草花圖 三枚

落掛上張附 一枚

草花圖 一枚

長押上下張附

草花圖 五枚

脇床張附

草花圖 三枚

襖

草花圖 四枚

明障子腰張

草花圖 二枚

(一五) 社務所與書院張附并襖繪畫 筑前介岸岱筆 紙本金地著色

春ノ間 (稱二之間) (插圖參照)

襖

春野稚松圖 八枚

長押上下張附

春野稚松圖 七枚

明障子腰張

水邊草花圖 三枚

菖蒲ノ間 (稱三之間) (插圖參照)

襖

水邊菖蒲水鳥圖 八枚

長押上張附

群蝶圖 四枚

明障子腰張

澤瀉圖 八枚

柳ノ間

床張附正面左右落掛上共金無地 四枚

襖

水邊柳樹白鷺圖

六枚

長押上下張附

水邊柳樹白鷺圖

十四枚

明障子腰張

岩石圖

六枚

欸云天保十五年歲次甲辰夏日同功筑前介岸岱寫

明治二十四年七月九日臨時全國寶物取調局ニ於テ優等ニシ

テ美術上ニ要用ナルモノト認定セラル

(一四)

社務所奥書院上段脇床袋戸山水圖 狩野直信筆 紙本墨畫 四枚

(一五)

社務所表書院富士之間張附并襖繪畫 村田丹陵筆 紙本

富士上ノ間

床張附正面左右共

富嶽圖 墨畫

三枚

長押下張附

富嶽圖 墨畫

二枚

襖

富士裾野圖 墨畫

八枚

明障子腰張

富士裾野圖 墨畫

四枚

富士下ノ間

襖

富士牧狩圖 著色

十六枚

明障子腰張

陣幕圖 伊藤紅雲筆

八枚

右繪畫ハ明治三十五年八月社費ノ補助ヲ以テ筆者丹陵村田

坊ノ寄附スルトコロナリ

(一五〇)

社務所表立關床張附檜樹鷺圖 森寬齋筆 紙本金地墨畫 三枚

(一五一)

社務所小座敷二階上間小襖琴基書畫圖 岡田爲恭筆 紙本金地著色 四枚

- (二五) 蘭陵王圖衝立 岸岱筆 紙本金地著色 一基
- 表蘭陵王圖 裏櫻樹太鼓圖
- (二五) 禁中繪圖 一枚
- (二五) 金光院繪圖 二枚
- (二五) 當宮神事塲繪圖 二枚
- (二五) 琴平山圖 十二枚
- (二五) 當宮舊社殿圖 二枚
- (二五) 當宮社殿圖 十六枚
- (二五) 田面繪圖 五枚
- (二六) 繪圖 一枚
- (二六) 讚岐國大繪圖模本 一枚

生駒讚岐守高俊寄附

什物之部 (什書)

- (三) 歷代皇陵圖 一幅
- (三) 文宣王像 一幅

- (四) 詣琴平社詩 伯爵井上馨筆 絹本 一幅
- (五) 尚書中之語 重野成齋筆 絹本 一幅
- (六) 題錦流亭詩 森春濤筆 紙本 一幅
- (七) 和歌 藤波東閣筆 二幅
- (八) 皇朝七福神圖 那須賢直筆 絹本 一幅
- (九) 群蟹圖 真鍋豐平筆 紙本 一幅
- (一〇) 四國新道開鑿起工式圖 合葉快堂筆 一幅
- (一一) 旌烈碑榻本 紙本 一幅
- (一二) 靈驗記榻本 紙本 一幅
- (一六) 書 三島中洲筆 紙本 一幅
- (一七) 琴平十二勝詩 和紀醉石筆 一卷
- (一八) 書畫帖 八帖
- (一九) 當宮繪馬鑑 筆者不詳 紙本著色 一枚
- (三) 書 三島中洲筆 紙本 一枚
- (三) 書 百外筆 紙本 一枚

東京府

子爵藤波言忠寄附

從五位三島毅寄附

- (三) 金毘羅大權現靈驗記碑榻本 一枚
- (四) 潮川神事塲碑榻本 一枚
- (五) 本宮舊圖 十七枚
- (六) 本宮壁板蒔繪櫻圖 一枚
- (七) 琴平山圖 一枚
- (八) 箱根葦湖圖襖繪 岡本常彥筆 紙本墨畫 三十五枚
- (九) 賀茂競馬圖衝立 森寬齋筆 絹本著色 一基
- (一〇) 裏岩石稚松圖 同筆 絹本墨畫
- (一一) 當山十二景書畫帖 書絹本墨畫 畫絹本著色 一帖
- (一二) 書筆者 矢土錦山 小中村清矩 黒川真頼 久米幹文 日下部鳴鶴
- (一三) 本居豐頼 森槐南 福羽美静 巖谷一六 伊東聽秋 岡本黄石
- (一四) 松原竹秋
- (一五) 畫筆者 河鍋曉齋 森雄山 河端玉章 平福穂庵 服部波山 福島柳圃
- (一六) 河邊花陵 松本楓湖 柴田是真 菅原白龍 瀧和亭
- (一七) 當山十二景書帖 絹本墨畫 一帖

- (一八) 筆者 森春濤 神波即山 鈴木重嶺 大沼枕山 永坂石埭
- (一九) 明治二十七八年戰役寫真帖 三帖
- (二〇) 懷紙 御歌所長男爵高崎正風筆 一枚 東京市 男爵高崎正風寄附
- (二一) 詩 隱岐重節書 紙本 一幅 陸軍少將正五位隱岐重節寄附
- (二二) 琴平山圖 河端玉章筆 絹本著色 一枚

崇敬講社本部特別備品之部 (講書)

- (一) 講書 書 日下部鳴鶴筆 紙本墨畫 二幅
- (二) 講書 書 市河米庵筆 紙本墨畫 一幅
- (三) 講書 爲朝護白河殿圖 高橋廣湖筆 絹本著色 二幅 東京淺草三好高橋廣湖寄附
- (四) 講書 四季草花圖 森寬齋筆 絹本著色 一幅
- (五) 講書 山水圖 僧雪舟筆 紙本墨畫 一幅
- (六) 講書 三河八橋圖 住吉慶舟筆 絹本著色 一幅 讚岐國琴平 琴陵光熙寄附
- (七) 講書 牡丹孔雀圖衝立 松浦春舉筆 紙本著色 一基
- (八) 裏河骨鯉圖 同筆 紙本著色

(講書) 講社本部小座敷上間床脇袋戸群雀圖 森寬齋筆 紙本著色 四枚
 (講書) 同上上間襖繪春景花鳥圖 森寬齋筆 絹本著色 四枚
 (講書) 同上次間襖繪秋景群鹿圖 森寬齋筆 絹本著色 八枚
 (講書) 同本部二階上間床脇袋戸油繪貝圖 高橋由一筆 四枚
 (講書) 同小座敷三間床脇袋戸油繪墨田川夜景圖 高橋由一筆 二枚

第八種 扁額屏風類

寶物之部 (寶扁)

(三)

六歌仙扁額 浮彫木製著色

六面 有馬玄蕃頭賴利室清涼院寄附

和歌筆者左ノ如シ

後京極攝政 鷹司房輔筆

慈鎮和尚 近衛右大臣基熙筆

俊成 有栖川宮幸仁親王御筆

西行法師 一條內大臣內房筆

權中納言定家 青蓮院宮尊證親王御筆

從二位家隆 梶井宮盛胤親王御筆

(三)

三十六歌仙扁額 金地著色 三十六面

生駒讚岐守正俊寄附

(四)

三十六歌仙扁額 金地著色 三十六面 高松城主松平右京大夫賴重寄附

和歌并ニ畫像筆者左ノ如シ

人丸

日光宮尊敬親王御書

狩野探幽齋守信畫

凡河内躬恒	青蓮院宮尊純親王御書	狩野探幽齋守信畫
中納言家持	右御同筆	右同筆
在原業平朝臣	右御同筆	右同筆
素性法師	右御同筆	右同筆
猿丸大夫	妙法院宮堯然親王御書	右同筆
中納言兼輔	圓滿院門跡大僧正常尊書	狩野自適齋尙信畫
中納言敦忠	右同筆	右同筆
源公忠朝臣	竹内宮良尙親王御書	右同筆
齋宮女御	右御同筆	右同筆
藤原敏行朝臣	高倉大納言永慶書	右同筆
源宗于朝臣	右同筆	右同筆
藤原清正	妙法院宮堯然親王御書	右同筆
藤原興風	右御同筆	右同筆
坂上是則	竹屋參議光長書	右同筆
小大君	右同筆	右同筆

大中臣能宣朝臣	滋野井大納言季吉書	右同筆
平兼盛	右同筆	右同筆
紀貫之	青蓮院宮尊純親王御書	狩野探幽齋守信畫
伊勢	右御同筆	右同筆
山邊赤人	梶井宮盛胤親王御書	右同筆
僧正遍昭	滋野井大納言季吉書	右同筆
紀友則	青蓮院宮尊純親王御書	右同筆
小野小町	右御同筆	右同筆
中納言朝忠	高倉大納言永慶書	狩野收心齋永真安信畫
藤原高光	右同筆	右同筆
壬生忠岑	竹内宮良尙親王御書	右同筆
大中臣賴基朝臣	右御同筆	右同筆
源重之	圓滿院門跡大僧正常尊書	右同筆
信明朝臣	右同筆	右同筆
源順	青蓮院宮尊純親王御書	右同筆

清原元輔

實相院門跡大僧正義尊書

狩野牧心齋永真安信書

藤原元真

梶井宮慈胤親王御書

右同筆

平仲文

右御同筆

右同筆

壬生忠見

小川坊城中納言俊完書

右同筆

中務

右同筆

右同筆

(五)

扁額 清國翰林院侍讀探花及第王文治書

語云降神觀

木彫著色 一面

欸云大清嘉慶三年歲次戊午五月中浣仁和弟子劉雲臺敬立

清國人劉雲臺寄附

(六)

扁額 清國人譚楷書

語云尋聲救苦

木彫著色 一面

欸云大清道光二年嘉平月穀旦佛弟子譚楷敬立

清國人譚竹庵寄附

(七)

扁額 琉球國人幸周書

語云德並照臨

木彫著色 一面

欸云乾隆甲寅孟夏穀旦謹立琉球國若狹町村習氏幸周小嶺筑登之薰沐

琉球國人筑登之幸周寄附

(八)

榜聯 清國人徐恭書

語云契寔之妙高矣無頂應物之權廣也巨際

一對

欸云奉揭大日本讚州金毘羅寶殿大清嘉慶十六年歲在辛未仲冬月吉旦新安荷

舟徐恭沐手敬書

清國人荷舟徐恭寄附

(九)

榜聯 清國人程赤城書

語云高開法海慈悲眼普濟人天業果身

一對

欸云吳趙赤城氏程霞生薰沐書

清國人程赤城寄附

(一〇)

榜聯 琉球國人比嘉仁屋書

語云履險獲安蒙聖庇渡閩返國報神恩

一對

欸云嘉慶元年孟夏吉旦琉球國比嘉仁屋叩立

琉球國人比嘉仁屋寄附

(一一)

當山社頭并大祭行列圖六曲屏風

日本繪師岩佐清信筆

紙本著色 一雙

(一二)

夏冬山水圖六曲屏風

狩野探幽齋守信筆

紙本墨畫彙筆繪 一雙

(一三)

源氏物語圖六曲屏風

傳云土佐光元筆

紙本著色 一雙

貴重品之部 (貴扁)

(一)

扁額 有馬常諦院書

語云神妙

絹本墨書

一面

有馬常諦院寄附

(二)

二見浦圖油繪扁額

高橋由一筆

一面

東京 高橋由一寄附

(三)

隅田川圖油繪扁額

高橋由一筆

一面

東京 高橋由一寄附

(四)

品川沖圖油繪扁額

高橋由一筆

一面

東京 高橋由一寄附

(五)

文庫扁額 僧正賢賀書

一面

- (七) 猿圖扁額 森狙仙筆 紙本金砂子地著色 一面 大阪堂島 橘屋新三郎寄附
- (八) 舞樂羅陵王圖扁額 谷文晁筆 桐金箔地著色 一面 江戸住 吉次寄附
- (九) 源為朝射強弓圖扁額 菊池容齋筆 桐生地著色 一面 中島定次郎寄附
- (一〇) 為朝護白河殿圖扁額 松本楓湖筆 椴金箔地著色 一面 東京松本楓湖寄附
- (一一) 六歌仙圖扁額 惺々翁筆 紙本著色 元岡田為恭藏品 一面
- (一二) 懷紙八曲屏風 懷紙六十四枚貼付 一雙

歌題竹裏聽鶯聲 享保二年正月二十四日一座懷紙

筆者 青蓮院尊祐 一乘院桑門常忍 東久世沙彌幽海 二條左大臣綱平

伏見宮中務卿邦永親王 應司從一位兼熙 二條內大臣吉忠 久我從一位通

誠 廣幡權大納言源豐忠 西園寺權大納言藤原致季 正親町三條權大納言

藤原公統 坊城權大納言藤原俊清 久我權大納言源惟通 一條權大納言藤

原兼香 鷺尾權大納言藤原隆長 中院正二位源通躬 冷泉權中納言藤原為

綱 滋野井權中納言藤原公澄 六條權中納言藤原有藤 油小路左衛門督藤

原隆典 今出川權中納言藤原公詮 冷泉民部卿藤原為經 武者小路從二位

藤原實陰 風早參議藤原公長 桑原式部權大輔菅原長義 石野參議藤原基

顯 水無瀨刑部卿藤原氏孝 阿野參議左近衛權中將藤原公緒 甘露寺參議

左大辨藤原尚長 園參議左近衛權中將藤原基香 藤波從二位大中臣景忠

岡崎正三位藤原國久 石山左兵衛督藤原師香 藤波神祇權大副大中臣德忠

伏原大藏卿清原宣通 愛宕正三位源通晴 藤谷左兵衛督藤原為信 芝山正

三位藤原廣豐 西大路從三位藤原隆榮 冷泉從三位藤原為久 中御門從三

位藤原宣顯 外山從三位藤原光和 六角從三位藤原益通 竹內從三位源惟

永 白川神祇伯雅冬王 高倉從三位藤原永房 高辻從三位菅原總長 大宮

左近衛權中將藤原公央 清水谷左近衛權中將藤原雅季 三條西右近衛權中

將藤原公福 山科內藏頭藤原堯言 北小路中務大輔藤原德光 籤左近衛權

中將藤原嗣義 千種左近衛權中將源有統 持明院左近衛權中將藤原基雄

植松左近衛權中將源雅康 五條少納言菅原為範 綾小路右近衛權中將源俊

宗 武者小路左近衛權中將藤原公野 花園右近衛權中將藤原實仲 風早右

近衛權中將藤原實積 日野右兵衛佐藤原資時 五辻彈正少弼源廣仲 堀河

中務權大輔藤原康致 今城右近衛權中將藤原定種 梅園左近衛權中將藤原

久季 七條左近衛權中將藤原信方 岡崎左衛門佐藤原國廣 阿野左近衛權

中將藤原師季 鳥丸藏人右中辨藤原光榮 勸修寺藏人權右中辨藤原敬孝
葉室藏人左少辨藤原賴胤 日野西右少辨藤原益榮 中御門侍從藤原宣誠
高松右近衛權少將藤原重季 四條左近衛權少將藤原隆春 倉橋民部少輔安
倍泰章 飛鳥井左近衛權少將藤原雅香

- (四) 山水圖六曲屏風 傳云僧雪舟筆 紙本金砂子地墨畫 一雙
- (五) 富嶽杉樹圖六曲屏風 狩野永德筆 紙本著色 一雙
傳云豐臣秀吉伏見桃山殿元所藏永德百雙屏風ノ一
- (六) 蘆白鷺圖六曲屏風 傳云狩野永德筆 紙本著色 一雙
- (七) 野馬圖六曲屏風 松本山月筆 紙本著色 一雙

什物之部 (什扁)

- (一) 琴平山圖油繪扁額 高橋由一筆 一面 東京 高橋由一寄附
- (二) 魚圖油繪扁額 高橋由一筆 一面 東京 高橋由一寄附
- (三) 軍艦比叡圖水彩畫扁額 落合某筆 一面 伊豫國五本松村向井和平寄附
- (四) 花鳥圖白磁扁額 白地著色 一面

- (五) 唐錢扁額 一面 越中新川滑川吉田佐四郎寄附
- (六) 山水圖染附白磁五曲庭屏風 一雙
- (七) 前赤壁賦六曲屏風 清國人王蘭谷書 一雙
- (八) 童舞羅陵王圖扁額 圓山應瑞筆 槻金箔地著色 一面 京都二條新町小西伊兵衛寄附
- (九) 古金銀篋入幣扁額 一面 攝津尼崎 本田甚右衛門寄附
- (一〇) 鷺圖扁額 森一鳳筆 檜板地著色 一面 對馬嚴原城主松平對馬守寄附
- (一一) 雲龍圖扁額 越前介岸駒筆 紙本墨畫 一面 越後嘉茂明田川仁右衛門寄附
- (一二) 靜女演舞圖扁額 中務權守法眼文周筆 絹本著色 一面
- (一三) 濱田彌兵衛圖扁額 佐藤正持畫 大國隆正贊 檜板地著色 一面
- (一四) 神馬圖扁額 西山芳園筆 檜板地著色 一面 攝津西宮 千足保矩寄附
- (一五) 高德題十字圖扁額 菊池容齋筆 桐板地著色 一面
- (一六) 堀河夜襲圖扁額 小林永興筆 桐銀箔地著色 一面 東京檜物町なた新寄附
- (一七) 鮪圖油繪扁額 高橋由一筆 一面 東京 高橋由一寄附